正宗敦夫と正宗文庫

岡山県立博物館　2023年度（令和5年度）テーマ展

国文学研究資料館・就実大学人文科学部

正宗敦夫

(1881-1958)

わが敦夫和気(わけ)の家より出(い)でねども
世の人知りぬ開きたる道

与謝野(よさの) 寛(ひろし)

※『冬柏(とうはく)』四巻八号(一九三三年七月)「海より渓へ(二)」初出

ごあいさつ

ようこそ、テーマ展「正宗敦夫と正宗文庫」へ――。

このたび、一般財団法人正宗文庫（岡山県備前市）が所蔵する古典籍類を取り上げて、岡山県立博物館においてテーマ展を開催することになりました。

正宗文庫は、国文学者で歌人の正宗敦夫（一八八一－一九五八、正宗白鳥の弟）が丹精込めて蒐集した古典籍・文書・短冊類を中心として、昭和一一年（一九三六）に郷里に創設されました。

このたびの展示では、正宗敦夫を顕彰し、正宗文庫の蔵書の豊かさを感じ取っていただくために、全体を四部に分かって紹介します。皆さまには、展示された古典籍類のさまざまな表情を楽しんでいただくとともに、古典籍類を集め、守り、伝えようとした〈知の巨人〉正宗敦夫の信念に思いを馳せていただければ幸いです。

本展示は、御覧の四者が互いに協力して初めて実現したものであり、国文学研究資料館の共同研究「正宗文庫の研究」（代表川崎剛志就実大学教授）の研究成果を反映しています。また、正宗敦夫と縁りの深い、ノートルダム清心女子大学および金光図書館（岡山県浅口市）にも格別のお力添えを賜りました。展示開催にあたり御懇篤なる御教導を忝なくしたすべての関係者各位に、心より感謝と御礼を申し上げます。

岡山の地で、この展示会が開催できるのは、わたくしどもにとってこの上ない喜びです。

皆さまには、どうか存分に、この豊饒なる備前文化をカラダごと感じ、吸収してくださいますように。

二〇二三年（令和五年）重陽の日に

岡山県立博物館長　細川　誠
正宗文庫理事長　正宗　千春
国文学研究資料館長　渡部　泰明
就実大学人文科学部長　井上あえか

目次

第一部　正宗家の人びと……5
正宗敦夫略年譜……6
正宗家系図……7
コラムA　敦夫と白鳥……14
コラムB　若き日の敦夫……15
第二部　敦夫の歌道の師と友人、出版事業……16
コラムC　日本古典全集と与謝野寛・晶子……25
コラムD　『万葉集総索引』……26
第三部　正宗文庫設立と郷土偉人の著作……27
コラムE　熊沢蕃山……42
コラムF　湯浅常山……43
第四部　善本の宝庫……44
〈紹介〉国文学研究資料館……52
〈紹介〉ノートルダム清心女子大学の正宗敦夫文庫……56
〈紹介〉就実大学　正宗文庫とのご縁……58
〈紹介〉岡山県立博物館……60
出品リスト……62
主要参考文献一覧……63

凡例

一、本冊子は、岡山県立博物館において、二〇二三年九月九日(土)から一〇月一五日(日)まで開催するテーマ展「正宗敦夫と正宗文庫」の展示リーフレットである。

一、作品の解説は簡潔を旨として、平易な記述を心掛けた。

一、執筆者による推定事項には〔　〕を付し、文字は通行の字体に従い、漢数字はイチゼロ方式で示した。

一、執筆は、国文学研究資料館特定研究(地域資料)「正宗文庫の研究」のメンバーがこれに当たり、川崎剛志・小川剛生・神作研一の三名が全体を整序するなど編集責任を務めた。

一、「コラムD」は田中大士日本女子大学教授に、「〈紹介〉ノートルダム清心女子大学の正宗敦夫文庫」は東城敏毅ノートルダム清心女子大学教授に、それぞれ特別寄稿していただいた。

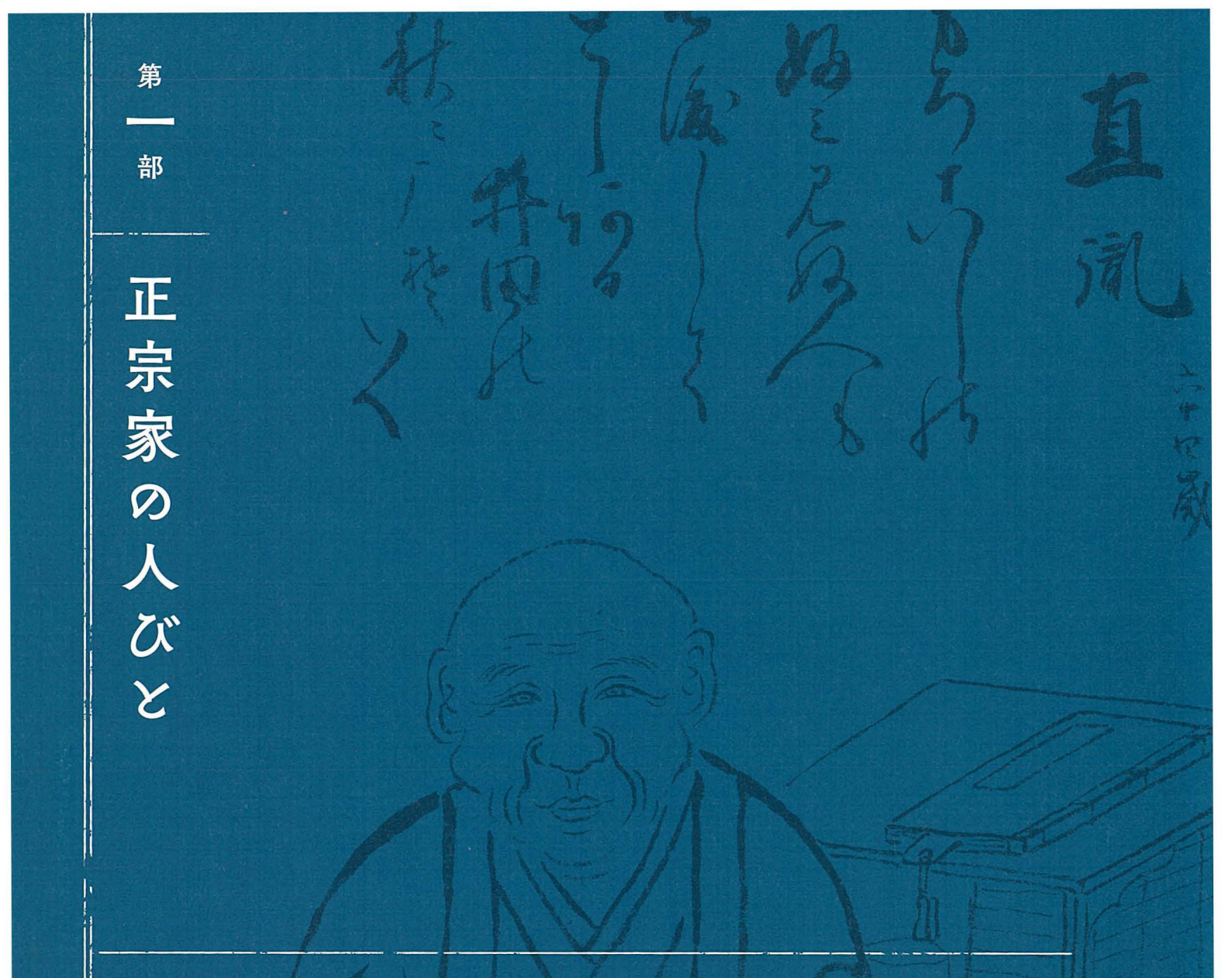
一、展示は、岡山県立博物館の内池英樹副館長と平田良行学芸員が主として、これに当たった。

国文学研究資料館 特定研究(地域資料)
正宗文庫の研究(二〇二二～二四年度)

《研究代表者》川崎剛志(就実大学教授)
小川剛生(慶應義塾大学教授)
尾崎名津子(立教大学准教授)
神作研一(国文学研究資料館教授)
竹内洪介(就実大学専任講師)
長福香菜(和歌山大学准教授)
新美哲彦(早稲田大学教授)
野澤真樹(京都女子大学准教授)
丸井貴史(専修大学准教授)
山本秀樹(岡山大学教授)

第一部

正宗家の人びと



敦夫が生まれ、生涯を送った伊里村（現備前市穂浪。江戸時代は灘村）は、岡山県東端の片上湾に面した半農半漁の静かな村です。海上の便があり、地主・網元であった正宗家は江戸時代後期には木材廻漕業を営み、財をなしました。

敦夫の曾祖父雅敦（一七八九～一八三八）は家業の傍ら、狂歌を好み、江戸の狂歌師六樹園こと石川雅望に入門し、「唐樹園南陀羅」の名で活動した風流人です。「なんだら」は灘村の語呂合わせでしょう。その弟の直胤（一八〇〇～一八六二）も和歌や国学を熱心に学んで、藤井高尚や加納諸平の高弟で、和歌を一〇、〇〇〇首も遺した歌人でした。家族も和歌を詠み、多くの歌人・画家が出入りしました。こうした文芸愛好の風潮は近隣にも拡がっていったそうです。

雅敦・雅広の二代に実子が生まれず、直胤実子の浦二（一八五四～一九三四）が養子に迎えられました。敦夫の父です。

浦二は妻の美禰（一八六〇～一九四二）との間に、七男三女を儲けます。そこからは敦夫のほか、白鳥こと忠夫（小説家）、得三郎（画家）、五男（実業家）、厳敬（植物学者）ら著名人が輩出しました。敦夫は家系図自慢を嫌ったそうですが、活動の根源は、堅実な生活を送りつつも、文芸を愛する代々の家風にあったことは疑いありません。

まず第一部では、正宗家の人びとの活動を明らかにします。

（小川）

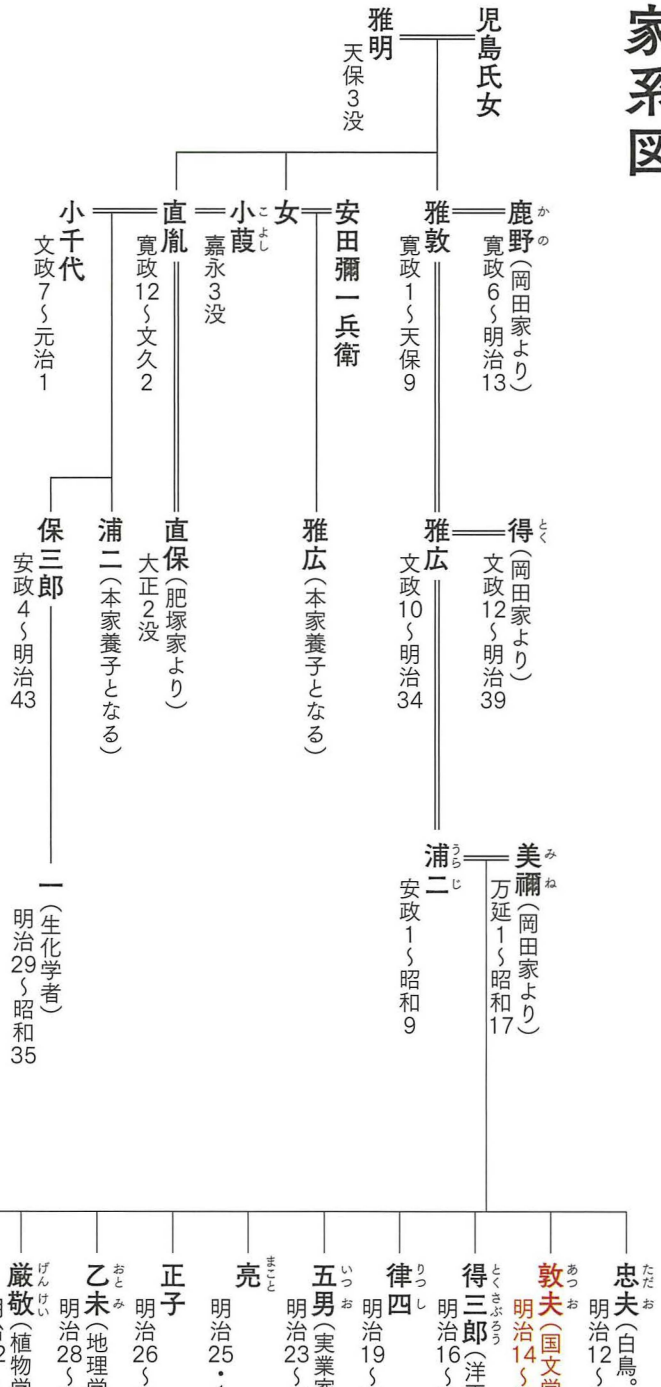
正宗敦夫略年譜

和暦(西暦)	年齢	敦夫の事績	家族・知人の事績
明治14(1881)	1	11・15 和気郡穂浪村(現・備前市穂浪)に生まる。	7・ 井上通泰、第三高等学校医学部教授になる。
明治28(1895)	15	3・ 協和高等小学校(現・備前市立片上小学校)卒業、家業に就く。	2・ 兄忠夫(白鳥)上京、東京専門学校入学。
明治29(1896)	16	4・ 「少年世界」に短歌を投稿。	
明治30(1897)	17	この年 井上通泰に入門。桂園派歌人の池袋清風・松浦辰男の指導も受ける。	8・13 通泰・塚本吉彦ら吉備史談会結成。
明治31(1898)	18	この頃 玉島の藤田荒次郎(安良)・長尾の小野節らと親交を結ぶ。	4・ 与謝野寛『明星』創刊。7・20 池袋清風没。
明治32(1899)	19	7・10 通泰の和歌に傾倒、注解を著す。	1・ 弟得三郎上京、絵画を学ぶ。11・8 井上通泰辞職し上京。
明治33(1900)	20	11・ 「松波遊山翁と語る」を山陽新報に発表、桂園派和歌に親しむ。	
明治35(1902)	22		
明治36(1903)	23	7・ 池袋清風の遺詠を集め『かゝしのや集』を刊行。	
明治37(1904)	24	2・ 児童図書閲覧所を開設。	
明治38(1905)	25	1・22 渡辺貞と結婚。11・23 長男甫一生。	
明治39(1906)	26	4・ 印刷機購入。8・ 雑誌「国歌」創刊。10・ 『菅沼斐雄歌集』刊行。	9・ 通泰・森鷗外、山縣有朋と語らって、常磐会を発足させる。
明治40(1907)	27	12・2 長女信子生。	8・3 通泰、御歌所寄人になる。
明治41(1908)	28	9・ 初めて上京。常磐会に出席、森鷗外・伊藤左千夫と知る。	1・〜4・ 白鳥『何処へ』発表。
明治42(1909)	29	7・ 「国歌」終刊、歌文珍書保存会設立、以後19冊を刊行。	
明治43(1910)	30	5・ 万葉集の索引編纂を企て東京帝大で橋本進吉に会う。8・ 与謝野寛と知る。	1・ 通泰、南天荘同人会を結成。5・ 白鳥、読売新聞を退社し作家生活に入る。得三郎、琅玕堂で個展開催。
明治45(1912)	32	この年 パナマ帽製造販売を始める。	2・4 宮内猪之熊没。
大正2(1913)	33	9・25 『宮内猪之熊集』編集刊行。	4・ 白鳥『入江のほとり』発表。
大正4(1915)	35	1・1 歌集『雞肋』を刊行。5・15 通泰『万葉集新考』巻一を編集刊行。	10・27 小野節没。
大正6(1917)	37	6・ 与謝野寛・晶子夫妻、正宗家を訪問。	
大正7(1918)	38	2・ 鷗外より古典叢書の企画を激励され山田孝雄を紹介される。	この年 山田孝雄ら古典保存会設立。
大正12(1923)	43	3・ 和気銀行倒産、取締役だった父浦二に代わり清算再建のため奔走。	
大正14(1925)	45	11・10 「日本古典全集」を与謝野夫妻と企画、刊行開始。	
大正15(1926)	46	2・19 大阪書林倶楽部にて短冊書画を競売に掛ける。	
昭和2(1927)	47	4・16 株式会社日本古典全集刊行会創立、役員となるも、倒産。長島豊太郎と共に「日本古典全集」の編集刊行を継続。	
昭和6(1931)	51	7・ 義弟辻村太郎に文庫建設計画を語る。11・ 『万葉集総索引』全五部刊行。	
昭和8(1933)	53	6・27 与謝野夫妻、正宗家を再訪。	6・ 白鳥『今年の春』発表。
昭和9(1934)	54	4・10 父浦二没。	3・26 与謝野寛没。
昭和10(1935)	55		
昭和11(1936)	56	6・17 財団法人正宗文庫認可。この年 桂又三郎を自宅に住まわせる。	
昭和13(1938)	58	この年 帰郷した藤原啓に備前焼陶工となることを勧める。	

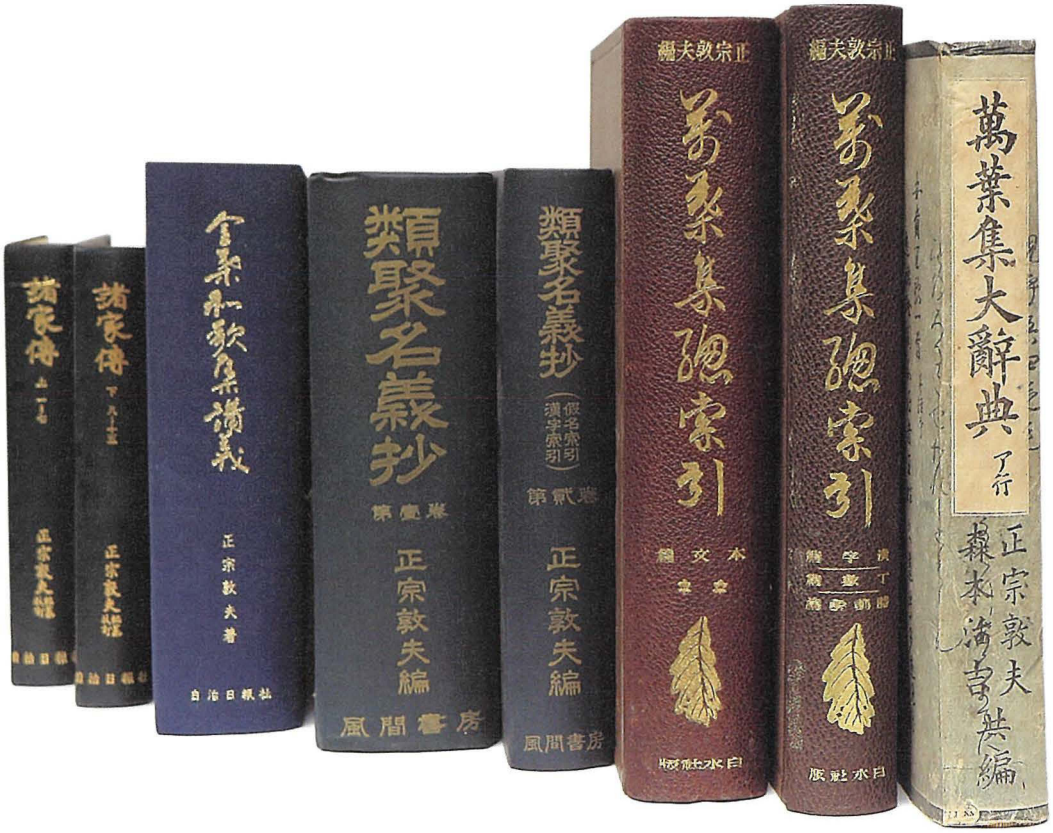
昭和16（1941）	61	
昭和17（1942）	62	4・25　母美禰没。
昭和18（1943）	63	6・15　『蕃山全集』（全六冊）完結。
昭和19（1944）	64	2・15　日本古典全集期外『新韻集』刊行、「古典文学全集」刊行終わる。
昭和24（1949）	69	2・　金光図書館報『土』に随筆の連載開始、「穂浪だより」「ふぐらにこもりて」と題して没年に及ぶ。
昭和27（1952）	72	4・　ノートルダム清心女子大学教授となり古今集・金葉集・近世和歌史を講ず。 冬　緑内障の手術を受ける。
昭和29（1954）	74	2・7　岡山県文化賞を受ける。
昭和30（1955）	75	秋　仙台の山田孝雄を訪問（最後の長途旅行）。10・27　金光図書館にて正宗文庫設立二十周年記念の万葉展示会を開く。
昭和33（1958）	78	11・12　自宅にて逝去。11・15　大学葬。
昭和34（1959）		

	8・15	井上通泰没。
	5・29	与謝野晶子没。
	6・	白鳥『今年の初夏』発表。12・　得三郎『ふる里』刊行。
	1・～6・	白鳥『人間嫌ひ』発表。
	11・20	山田孝雄没。
	1・	白鳥『今年の秋』発表。

正宗家系図



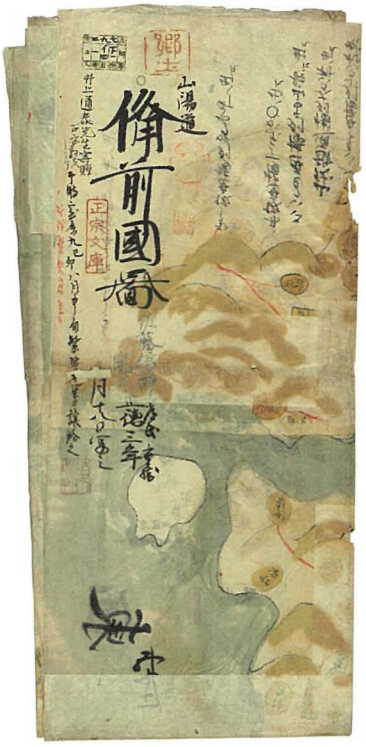
※吉崎志保子『正宗敦夫の世界』により、一部修正した。　※縦の二重線は養子関係。



1-1 正宗敦夫の編著書

いまだ知られざる大学者

『万葉集総索引』・『類聚名義抄』（院政期成立の漢字字書）・『金葉和歌集講義』（五番目の勅撰和歌集の注釈書）・『諸家伝』（公家の当主の略歴集成）など、いまなお研究者が必ずお世話になる、重要な基礎文献です。敦夫は小学校を卒えた後は郷里に住み、独力で研究を続け、これらの著作を作り上げました。一体どんな人物だったのでしょうか。（小川）

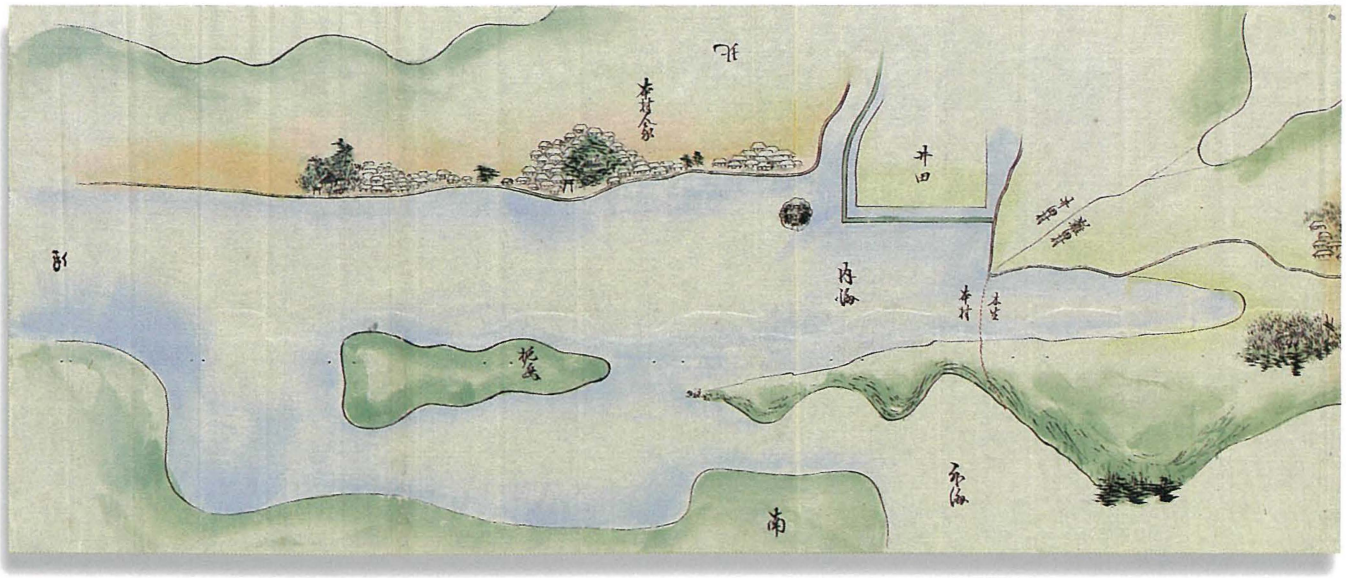


1-2

備前国絵図

江戸時代の国絵図に見る正宗家の位置

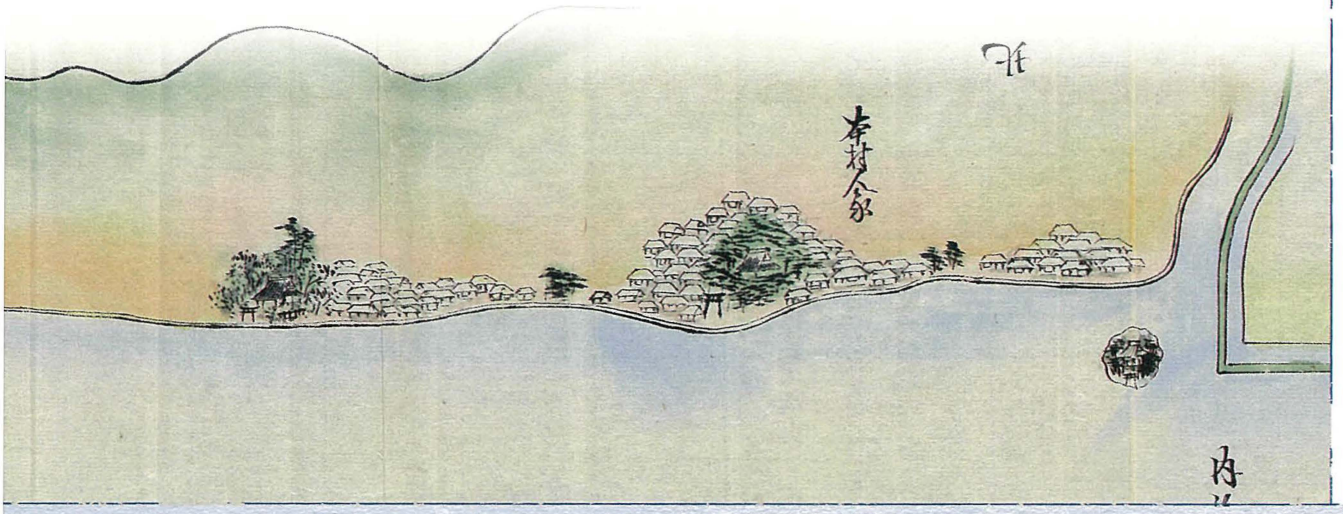
寛永一〇年(一六三三)、江戸幕府が諸大名に作らせた国絵図、「日本六十余州図」の写しと考えられます。村は円形で示され、正宗家の場所は当時「なだ」(雄田・灘)村でした。東は「日生」、西は「あそうな」(麻宇那)です。この図は備前ではなく仙台藩士の家に伝わり、井上通泰が入手したものです。通泰は晩年播磨国風土記の研究に没頭、国絵図を蒐集し、いくつかを愛弟子の敦夫に寄贈しました。　(小川)

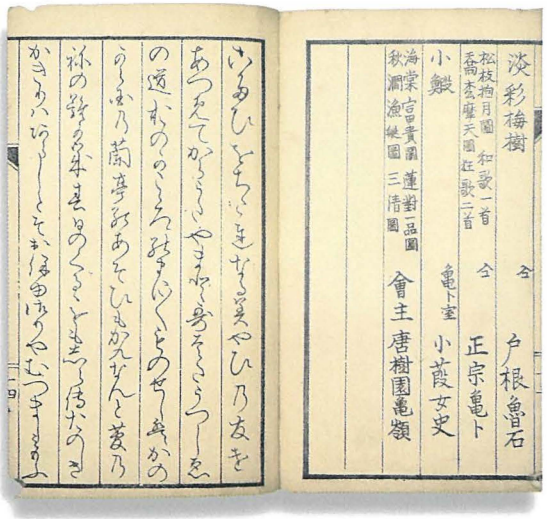


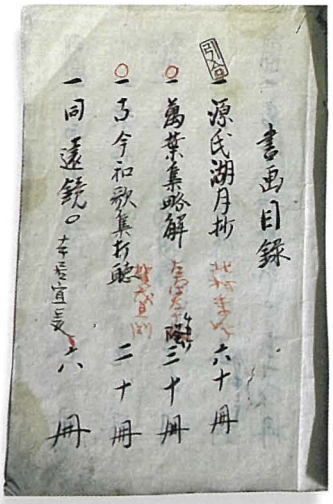
1-3 灘村及井田、木生之絵図

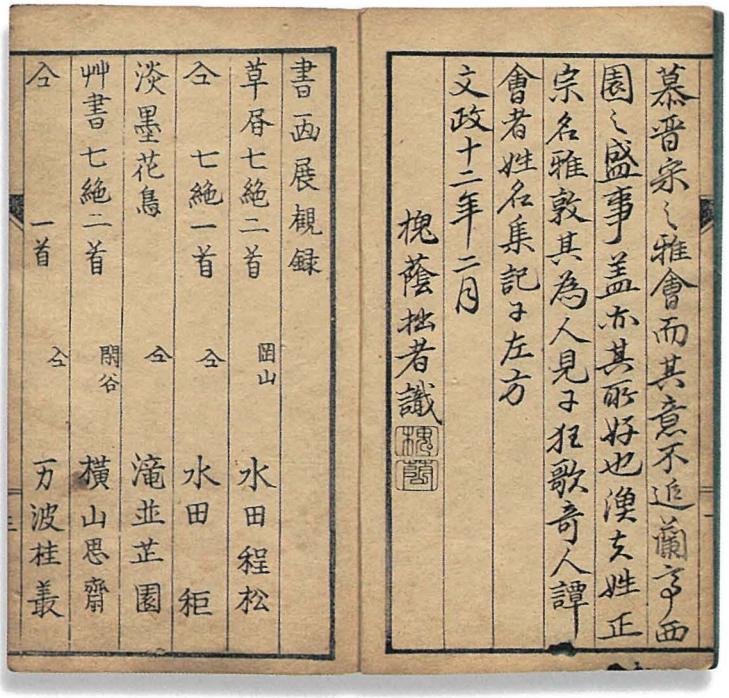
わが村と入江の地図

江戸後期頃の灘村と、枝村の井田村・木生村を描いた絵図です。湾内には梔島（現在の前島）が描かれます。内海（片上湾）の漁場境界の取り決めに利用されたものでしょうか。正宗家は「本村人家」と示される灘村の中央、鳥居のある住吉神社の隣にありました。三つの村が明治八年（一八七五）に合併、穂浪村となり、二二年には麻宇那村ほか七村と合併して伊里村となりました。二年後、敦夫の父浦二が村長となります。（小川）









1-4

唐樹園蔵書目録・書画展観録

粋人の曾祖父が集めた書物

雅敦の蔵書目録です。敦夫も「私の先祖に石川雅望門人で狂歌和歌を楽しみ書画骨董道楽に耽つた者があつた」と回想していますが、和歌・俳諧や物語・軍記の版本が多く、教養の質が察せられます。書名に「引合」の印を捺したり、朱の丸点を付けているのは、蔵書点検の痕と思います。また雅敦が隣の片上村で収蔵品の展観会を開いた時の出品目録もお目にかけます。

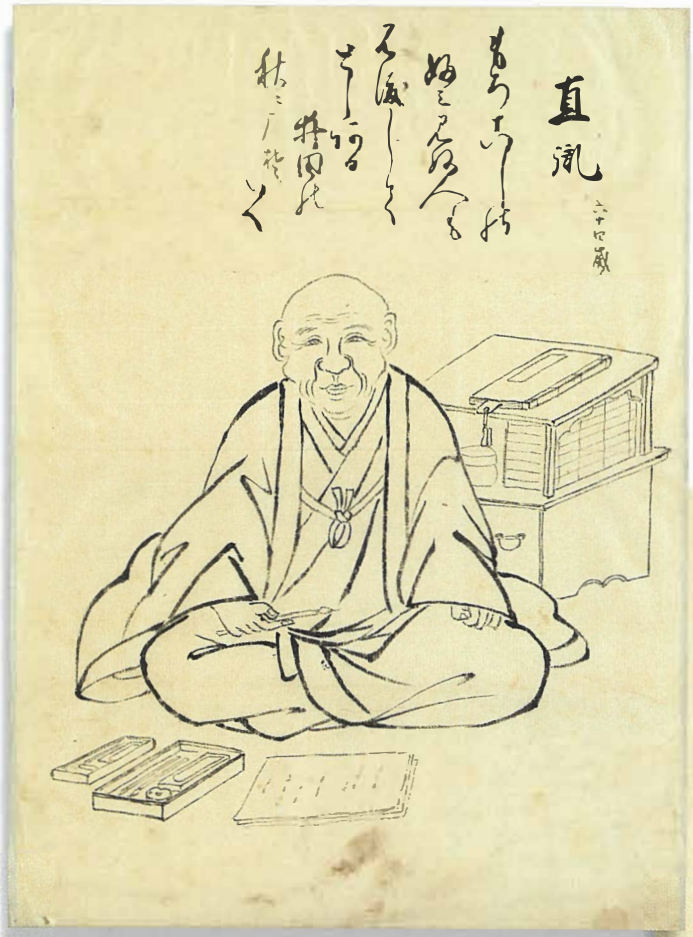
（小川）

1-5 朝顔百首狂歌集

狂歌を通じて全国に知られた正宗家

雅敦は当時の文人の例に洩れず朝顔が大好きだったそうです。そこで全国狂歌人の朝顔の詠、一〇〇首を集め、江戸の石川雅望に序を書いてもらい、大坂の狂歌本出版元である扇屋利助（千里亭藪虎）に刊行させています。趣味が嵩じての出版には資金が必要でしたが、正宗家の文芸愛好は各地に知られていたのでしょう。六石園飯持こと直胤の作も見えます。

（小川）



1－6

井田村神社奉納三十六歌仙稿本

近隣の歌人たちの肖像

敦夫の実の祖父である直胤が隣村の井田神社に奉納した歌仙絵扁額の下書きです。ここでは地域の歌人たち三十六人が歌仙です。おのおのの和歌を上に記し、下にその姿を描きます。この地で和歌が盛んであった様子が知られます。武士、神官、僧侶、商人とさまざまな人物の姿がユーモラスな筆致で描かれ、好もしいものです。江戸時代の地域文化の質の高さも分かります。

（小川）

コラム A

敦夫と白鳥

正宗白鳥（忠夫）は敦夫のことを複数の作品に書き残しています。「今年の秋」（一九五九年）は一連の作品のうち最後のもので、敦夫の最晩年が描かれています。白鳥は二歳下の弟「A」を「人類のうちで、私が最もよく知つてゐる人間」だと述べています。

二人は兄が小学校を出るまで寝食を共にし、その後、兄が隣村のキリスト教会に通う際は、弟も時々同行していました。後年には、父・浦二から正宗家を任されることにもなりました。病床の父は「まあ二人でけんかをせいで、後をえゝようにやつて呉れ」と言ったと「今年の春」（一九三四年）にあります。

「今年の秋」の末尾には、Aが病床で洗礼を受けて詠んだ次の歌が引用されています。

洗礼の水まろらかにかほにおつ
かしらにそゝぐたふときろかも

そして、「私」は自分よりも「Aの方が仕合はせか。」と呟きます。「人類のうちで」最もよく知る弟に先立たれた寂しさが伝わりますが、なぜAの歌が最後に登場するのでしょうか。実は、白鳥は岡山時代に歌に志したことがありました。しかし、上京以後は短歌から距離を取ってしまいます。それは、敦夫との力の差を実感したためだとも言われています。白鳥からすれば、こうした形で自分よりも作歌の才に恵まれた弟を称えようとしたのかもしれません。父に家を託された二人が、文学によっても強く結ばれていたことが窺えます。（尾崎）

コラム B

若き日の敦夫

敦夫は自らのことを余り語らない人で、青年期のことはよく分かっていませんでした。兄弟の白鳥や得三郎は十代で郷里を飛び出しますが、敦夫は片上（かたかみ）の高等小学校を卒業後、進学も上京もせず、父浦二の命で家業を継ぎました。

息子の甫一（ほいち）によれば、それは「岡山にて諸品を仕入れ、舟三度にて灘の入江につけ、其処より積上て、家又は納屋に入れ、品々を売却す。今の百貨店なり」（「正宗敦夫伝」）というものでした。大家のお坊ちゃんの余裕は感じられませんが、文芸への愛好心はいよいよ強くなったようです。岡山に出る機会を幸いに、交遊を拡げていきます。

文庫の調査、あるいは近年の文献デジタル化により、青年期についても埋もれた資料が出て来て、新たな足跡が判明しています。書物を求め、なければ人から借りて写し、短歌や文章を新聞雑誌に投稿する、多忙ながら充実した生活であったようです。

交通不便な地方に住み、自身何度もそのことをかこちながら、アンテナを伸ばし、外界に盛んに発信していたことは注目すべきでしょう。辛辣な白鳥も、手紙では弟思いの兄でした。明治三四年二月の書簡では、「殊に年も若く、此便利な世に生れて田舎に居ても書物を買ふて読みて居れば天下の人を友とせられる時だから少々淋しい位は辛棒（しんぼう）できるであらうし田舎には又田舎で面白い所もあり、世に尽す仕事がある。」と励ましています。敦夫は一生をここで過ごす決意を固めていたのでしょう。

（小川）

第二部

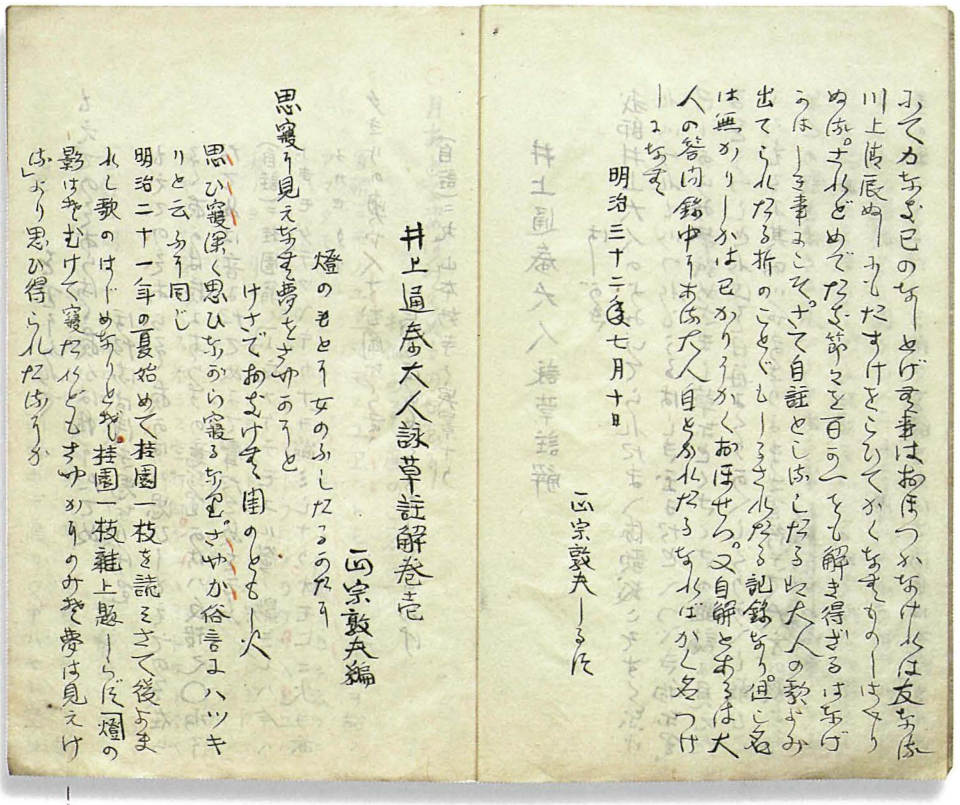
敦夫の歌道の師と友人、出版事業

最も古い敦夫の創作は、明治二九年（一八九六）四月、東京の博文館発行の雑誌「少年世界」に投稿した短歌です。

「岡山県備前国和気郡伊里村　正宗敦夫」の名、「旧都花」という題で、「荒れはてし志賀の都も春さればむかしながらの花咲にけり」と詠みます。これにも明らかなように、敦夫は、古今集を宗とする旧派の桂園派を学びました。これは、桂園派が備前・備中で流行したことも関係するかも知れません。最後の桂園派歌人と言われた池袋清風の指導も受けています。

その頃、やはり古典的な歌風で知られた井上通泰が岡山に赴任してきます。敦夫はすぐ入門を許されます。通泰の影響は大きく、生涯にわたり敬愛しました。岡山では生涯の友となる小野節や藤田荒次郎（安良）とも知り合い、藤田からは正岡子規の写生の説を聞いたそうです。こうして古典研究や作歌に一層励みます。

敦夫は自宅に印刷機を据え、通泰門下が作品を発表し批評する場として、雑誌『国歌』を創刊します。また、桂園派歌人の重要作品が多く写本のまま埋もれているのに気付き、通泰と相談しつつ、世に広めようと「歌文珍書保存会」を設立、出版事業を始めます。事業を継続させるため予約出版としたのも、全国に先駆けてのことです。学術と生活の両立、何より社会への還元を心に懸けた、ユニークな活動を紹介します。（小川）



井上通泰大人詠草註解卷壱

正宗敦夫編

燈のもとうの女のふしたるのたり

思寝うの見えなきを夢とさゆのうと

けさでおもけき国のともし火

思ひ寝ぬく思ひなから寝るなき星さやか俗言ハツキ

りと云ふう同じ

明治二十一年の夏始めて荘園一枝を読みさて後ふま

れし歌のはじめなりとぞ。荘園一枝題上題ーらだ燈の

影はそむけて寝たれども夢はさゆかりのみぞ夢は見えけ

ばより思ひ得られたるうか

ふてかなぶ已のなーとげき事はおほつかなけれは友なる

川上俊辰ぬーみしたすけをこひてかくなきすのーはくう

ぬ所なれどめでたき第々を百の人をも解き得ざるは年げ

うはーを事ぬこそさて自註としふしたる此大人の歌をか

出てられたる折のことぐもーるされたる記録なう。但し名

は無かりーかは已かりうかくおほせる。又自解とあるは大

人の答問錯中うあられ大人目とかれたるなれはかく名つけ

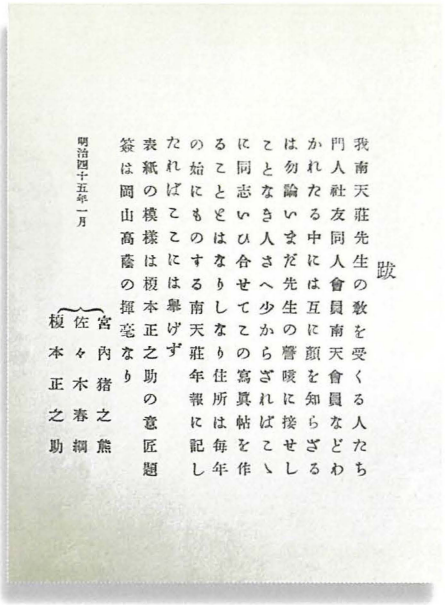
ーるなり

明治三十二年七月十日

正宗敦夫ーるた

2-1

2-2



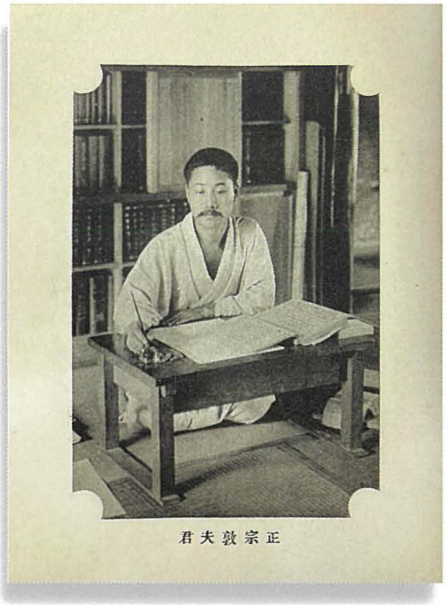
跋

我南天荘先生の教を受くる人たち門人社友同人會員南天會員などわかれたる中には互に顔を知らざるは勿論いまだ先生の謦咳に接せしことなき人さへ少からざればこゝに同志いひ合せてこの寫眞帖を作ることとはなりしなり住所は毎年の始にものする南天荘年報に記したればこゝには擧げず

表紙の模様は榎本正之助の意匠題簽は岡山高蔭の揮毫なり

宮内猪之熊
佐々木春綱
榎本正之助

明治四十五年一月



正宗敦夫君

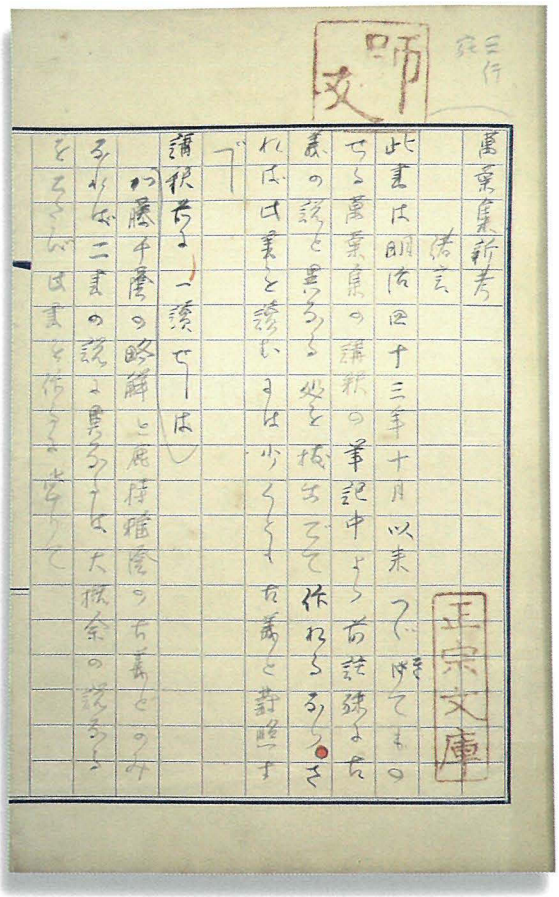
2-2

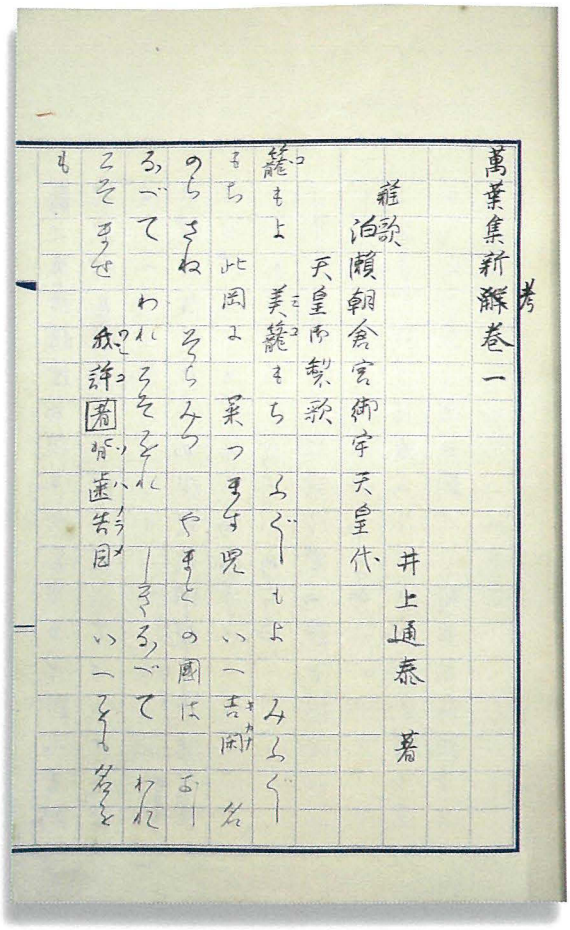
2-1 井上通泰大人詠草註解

2-2 南天荘同志写真帖　第一集

先生の作品をもっと知りたい、正しく読みたい

文庫調査で新たに見出された、敦夫の自筆稿本です。通泰への傾倒は生涯続きますが、最初の仕事として、敦夫は通泰の歌を注釈します。語釈・歌意を示し、そして通泰の見解も引きつつ説明する、本格的な内容です。通泰は余り弟子を取らない人でしたが、自分の歌をこれほど愛してくれる若者の出現は嬉しかったことでしょう。通泰門下の交流をはかって出版された写真帖をあわせて示しました。南天荘とは通泰の号です。（小川）





2-3

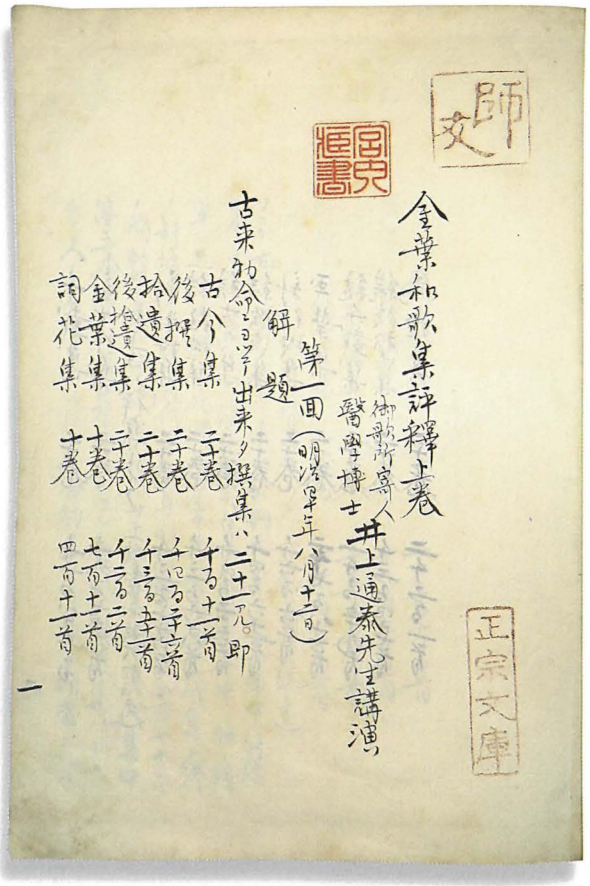
万葉集新考原本

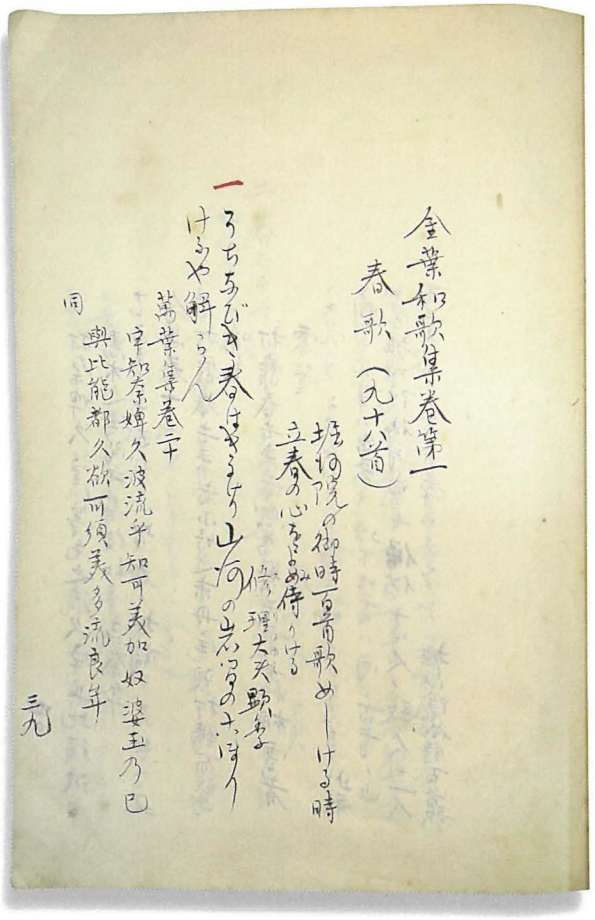
（井上通泰著）

通泰と敦夫のコンビ、万葉集全注釈をやり遂げる

通泰は上京後、自宅で歌書を定期的に講じていました。敦夫は地方在住者のためにと、万葉集の講義録の公開・出版を願い出ます。通泰は当初消極的でしたが、敦夫は一巻ずつ新たに稿を起こして貰い、十余年かけて編集刊行しました。これが『万葉集新考』で、近代最初の全注釈です。通泰は敦夫の勧めがなければとても出せなかったと述べています。展示したのは、通泰の自筆原稿を製本した原本です。

（小川）


金葉和歌集評釈上巻
御歌所寄人
醫學博士 井上通泰先生講演
第一回（明治四十年八月十一日）
解題
古来勅命ニヨリテ出来タ撰集ハ二十一ヲ数ヘ即
古今集 二十巻
後撰集 二十巻
拾遺集 二十巻
後拾遺集 二十巻
金葉集 十巻
詞花集 十巻
千百十一首
千百二十首
千三百五十首
千三百二首
七百十二首
四百十一首
一
師文
宮内庁書陵部
正宗文庫


金葉和歌集巻第一
春歌（九十八首）
堀河院の御時百首歌めしける時
立春の心をよめ侍りける
俊頼大夫歌
一 うちなびき春はきぬとや山の端の岩の上ぶるけふの鶯
萬葉集巻十
宇知奈婢久波流乎知賀美加奴 婆玉乃已
與比能都久故 可須美多流良牟
同
三九

2-4

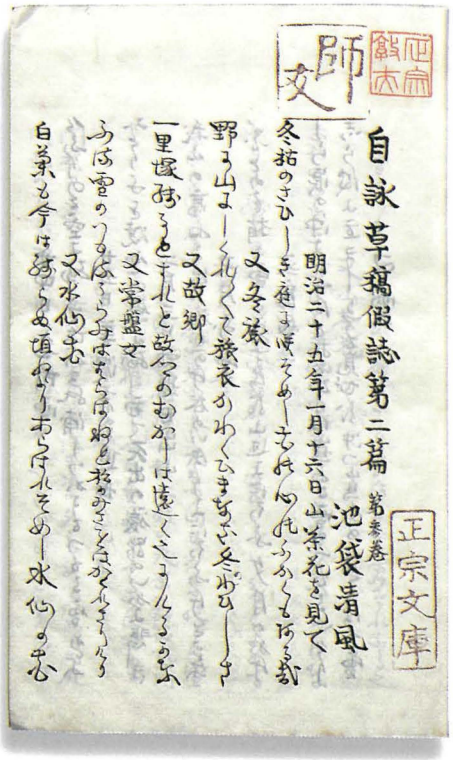
金葉和歌集評釈

（井上通泰著）

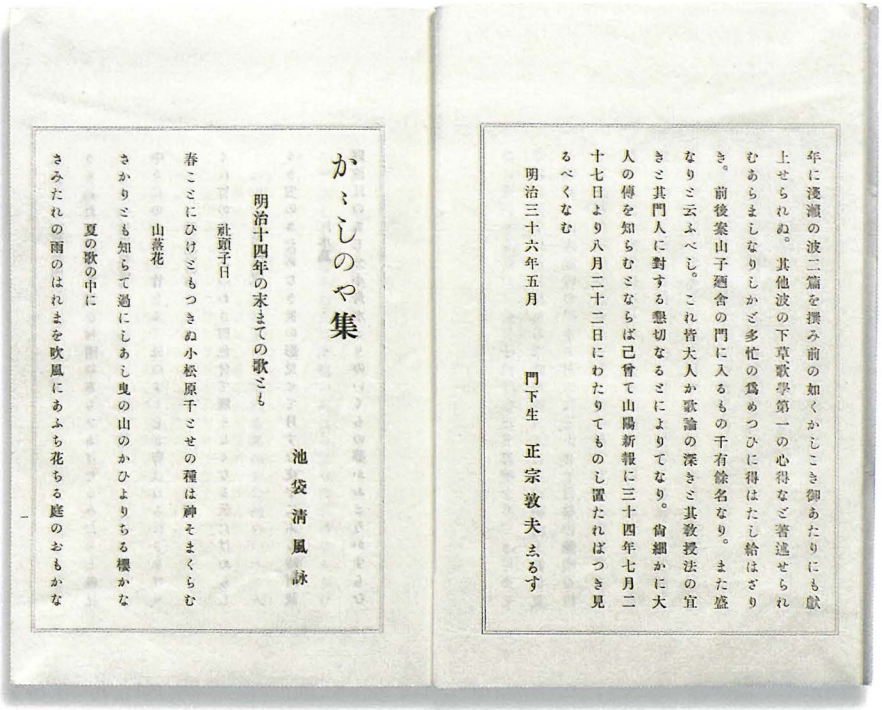
先生の口吻そのままの講義録

通泰は明治四〇年（一九〇七）八月から四四回に亘り、金葉和歌集（五番目の勅撰集）を講義します。それを門人宮内猪之熊が筆記した講義録の原本です。講義はユーモアと熱意に溢れ、創見にも富んでいます。晩年の敦夫もまた金葉集研究に打ち込みますが、清新な歌風で知られる金葉集の成立を、通泰の説を受け、明治の短歌革新に比しているのは興味深いところです。

（小川）



2-5



年に淺瀬の波二篇を撰み前の如くかしこき御あたりにも獻上せられぬ。其他波の下草歌學第一の心得など著述せられむあらましなりしかど多忙の爲めつひに得はたし給はざりき。前後案山子廼舍の門に入るもの千有餘名なり。また盛なりと云ふべし。これ皆大人か歌論の深きと其教授法の宜きと其門人に對する懇切なるとによりてなり。尚細かに大人の傳を知らむとならば已曾て山陽新報に三十四年七月二十七日より八月二十二日にわたりてものし置たればつき見るべくなむ

明治三十六年五月　　門下生　正宗敦夫　ふるす

かゝしのや集

明治十四年の末までの歌ども

池袋清風詠

社頭子日

春ごとにひけどもつきぬ小松原千ごせの種は神そまくらむ

山蒸花

さかりとも知らで過にしあし曳の山のかひよりちる櫻かな

夏の歌の中に

さみたれの雨のはれまを吹風にあふち花ちる庭のおもかな

2-6

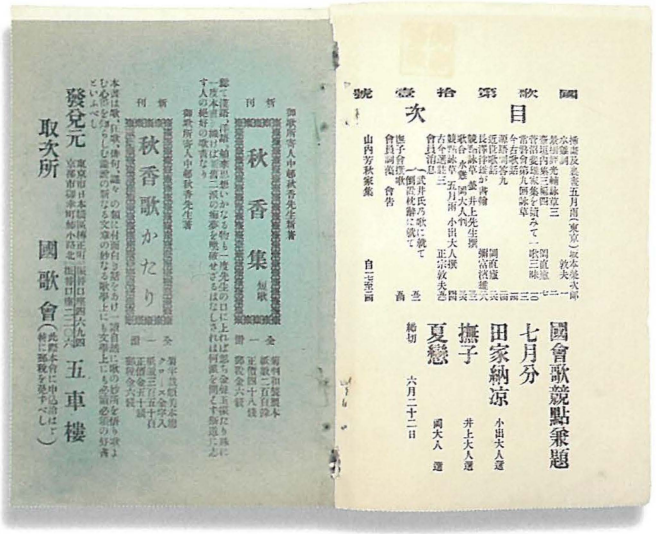
清風先生の詠歌を編纂・刊行

2-5 池袋大人詠草

池袋清風（一八四七～一九〇〇）は日向都城出身の桂園派歌人で、敦夫は通信教育で清風から和歌の指導を受けていました。清風没後、敦夫は家集の編纂をおこなうべく清風の妻より送ってもらった数千首に及ぶ詠草を年代・日付順に筆写しました。本書は明治二五年（一八九二）から同二九年（一八九六）までの詠草を集成した一冊です。この詠草の中から選抜された和歌が『かゝしのや集』に収められています。（長福）

2-6 かゝしのや集

明治三六年（一九〇三）に刊行された池袋清風の家集で、敦夫が編纂と発行を担いました。桂園派歌人の鎌田正夫と井上通泰に選歌を依頼し、数千首の中から選抜された三八九首が年代順に配列されています。また、敦夫による清風の伝記も収めます。家集名は清風がおこした「案山子廼舍」という社名に基づきます。刊行にあたっては資金不足が最大の難事であったようですが、この経験が予約出版という事業に繋がっていきます。（長福）

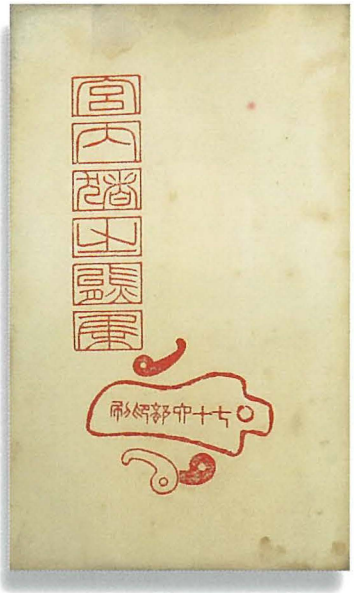


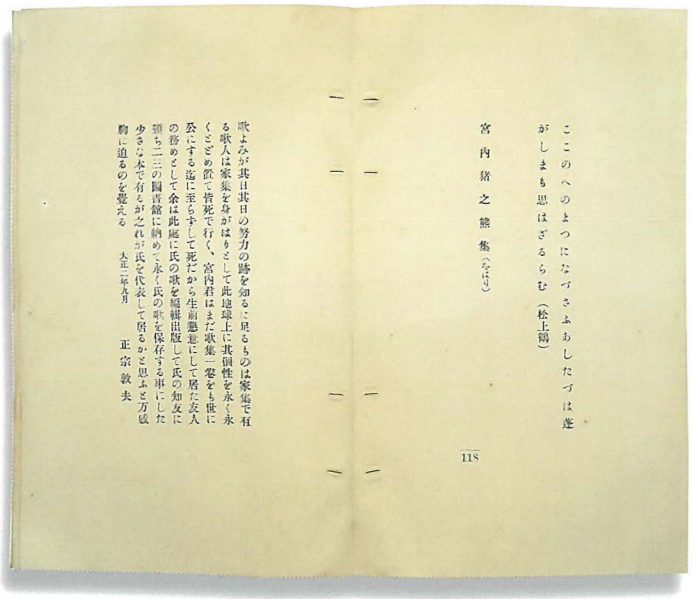
2-7

雑誌『国歌』

井上通泰門下のために出した短歌雑誌

明治三九年（一九〇六）創刊の、通泰門下の結社「国歌会」の月刊誌です。原稿募集から編集、印刷製本まで敦夫が担当しました。また得三郎が挿絵を描いています。作品と批評のほか、有名歌人の作品紹介、古今の歌文に関する考察など多彩で、伊藤左千夫・古泉千樫なども寄稿しています。明治後期にもなお息づいていた地方の文学愛好熱が知られます。（小川）





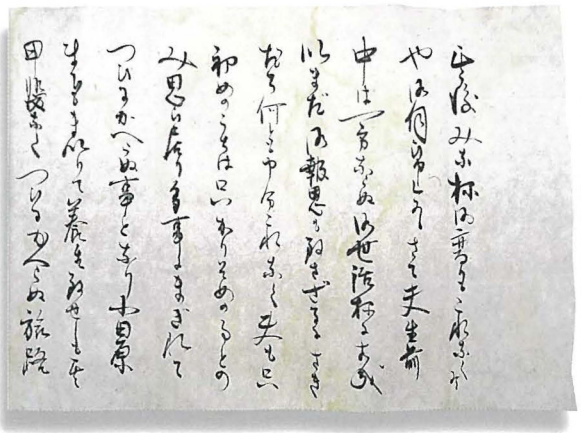
ここのへのまつになづさふあしたづは逝がしまも思はざるらむ（松土岡）

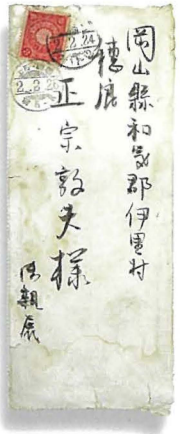
宮内猪之熊集（さはら）

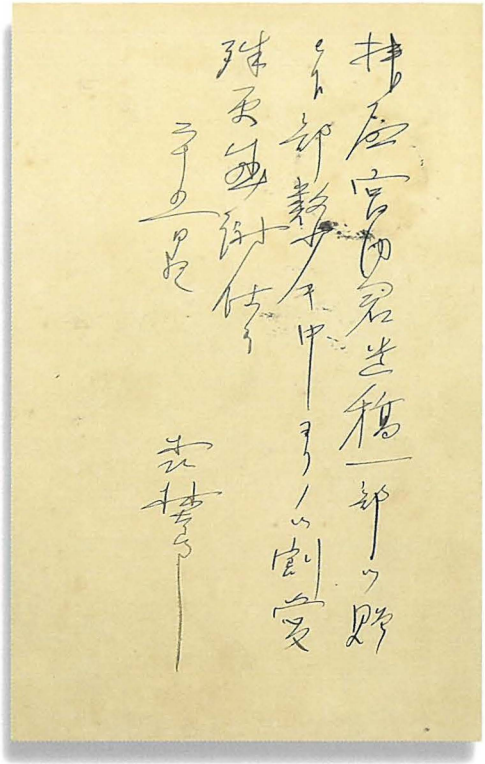
一　一
一　一
一　一
一　一

118

歌よみが其日其日の努力の跡を知るに足るものは家集で有る歌人は家集を身がはりとして此地球上に其個性を永く永くとどめ置て皆死で行く、宮内君はまだ歌集一卷をも世に公にする迄に至らずして死ぬから生前悲歎して居た友人の務めとして余は此庭に氏の歌を編輯出版して氏の知しに類ち二三の圖書館に納めて永く氏の歌を保存する事にした少きな本で有るが之れが氏を代表して居るかと思ふと万感胸に迫るのを覚える　大正二年冬月　正宗敦夫







2-8

宮内猪之熊集・宮内久子書簡・森鷗外ハガキ

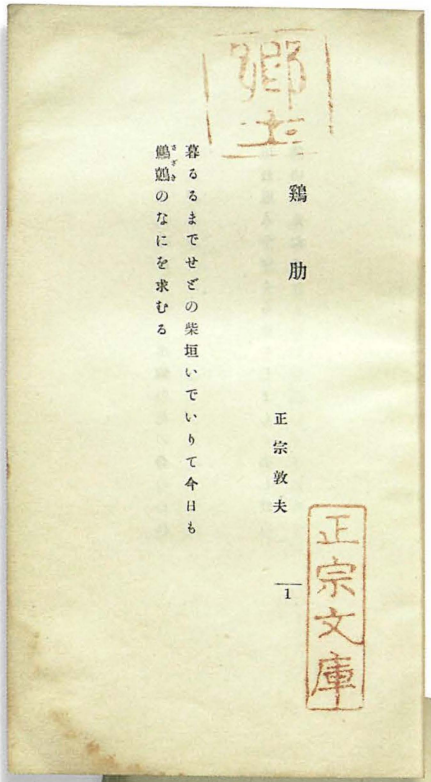
（大正二年二月二三日）

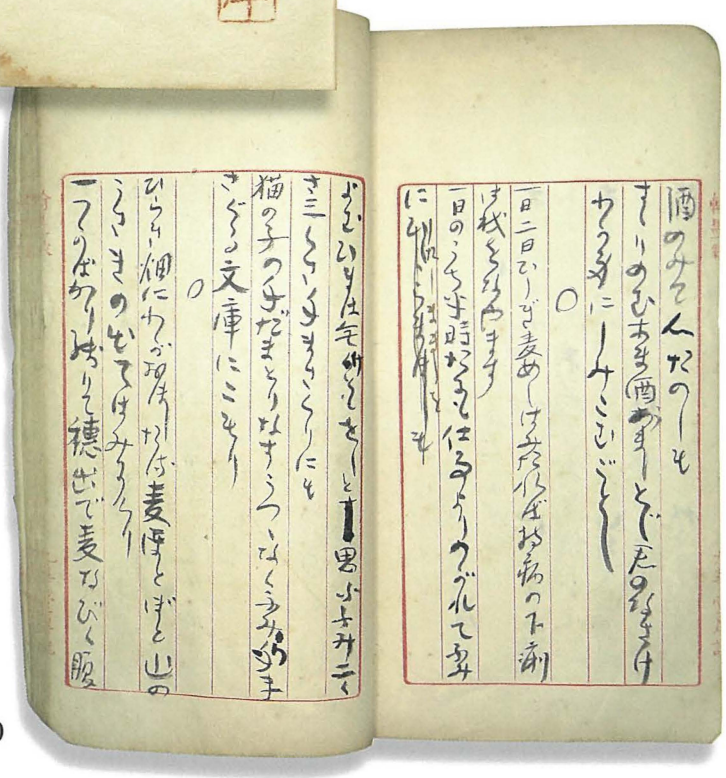
（大正二年九月二五日）

友情のあかしの編集と出版

宮内猪之熊（19頁参照）は通泰門下の新進歌人で、森鷗外の日記にも登場しますが、早世してしまいます。敦夫は遺詠を集め出版、知友に贈りました。自分の歌集も出していない敦夫ですが、友人の作品を世に留めようと献身したのでした。あわせて鷗外の礼状と、妻久子の書簡を示しました。敦夫は猪之熊が主宰した短歌雑誌『みつしほ』も支援しており、久子は深く感謝しています。（小川）

2-9





2-10

歌集雑記（仮称）

2-9　鶏肋

2-10

歌はもうやめるが…

敦夫唯一の歌集で、一八二首を厳選します。「鶏肋」とは価値はないが捨てるに惜しいものという意味です。歌風は端正ですが古めかしく、この頃知り合った与謝野寛（鉄幹）は、「温雅」と評しつつ、「旧吾を脱して新吾へ」と脱皮を促します。その後の敦夫は古典研究に没頭しますが、折りに触れ市販の手帳に短歌を書き留めていました。こちらは自由な詠みぶりで、とくに生活苦や眼病に悩んだ晩年の作は率直な感情が溢れています。

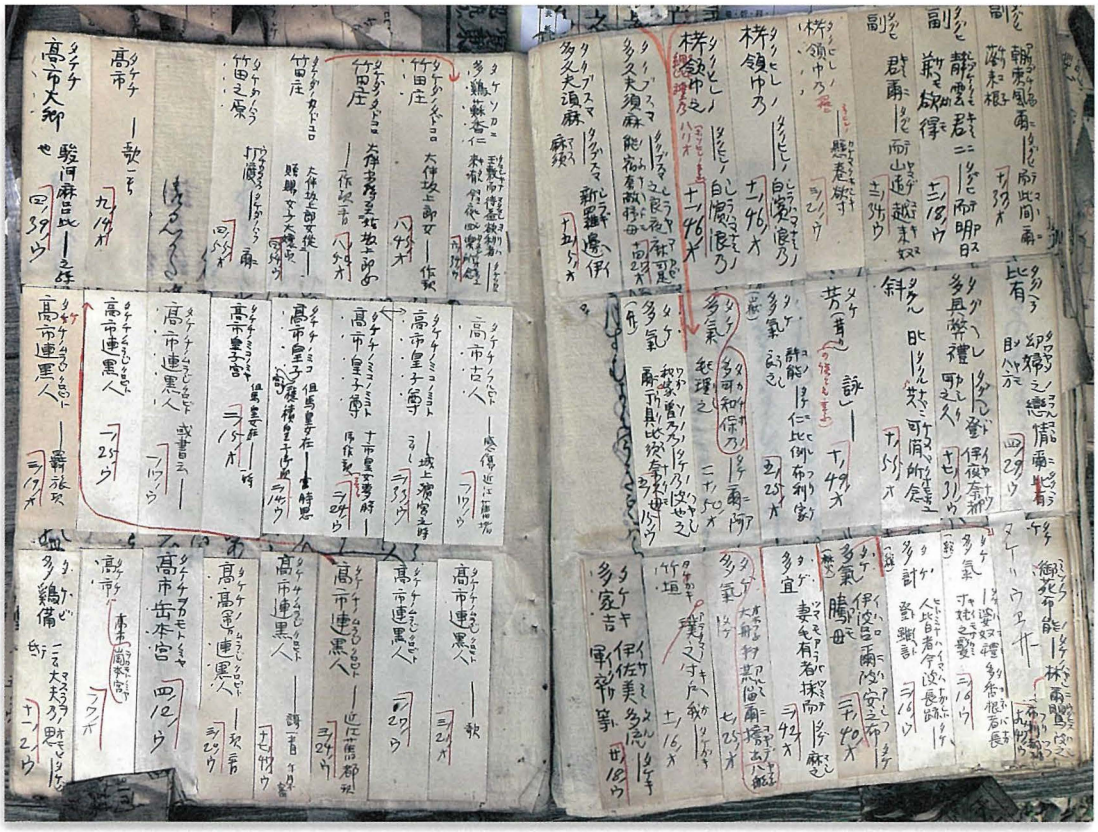
（小川）

2-11

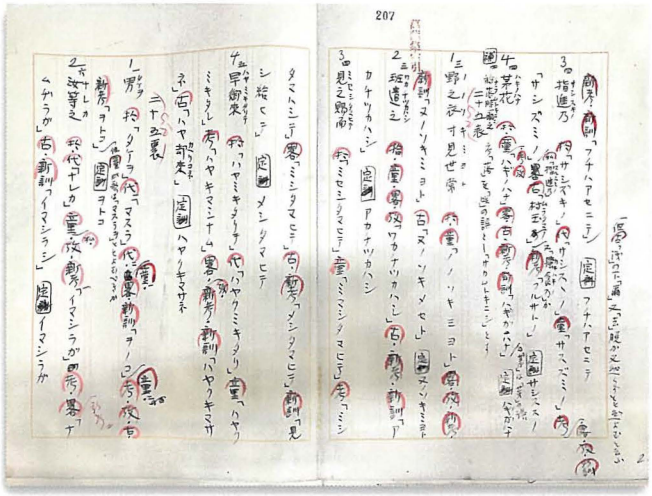
『万葉集総索引』関係資料

二〇年の苦闘の跡

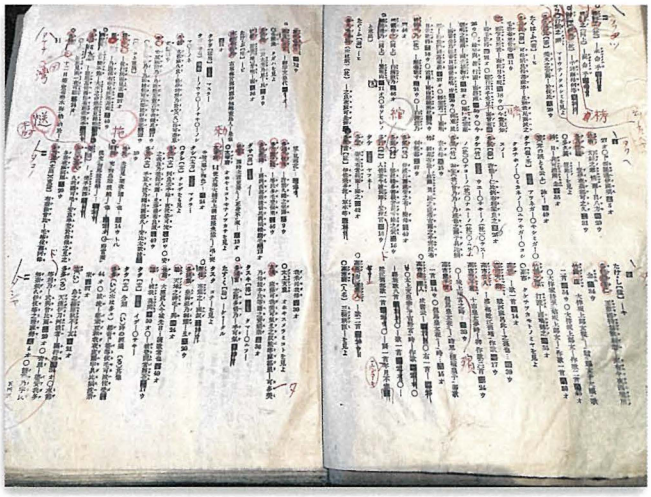
万葉集は所謂万葉仮名、漢字だけで表記されるため、索引が必要とされながら、完成させた人はいませんでした。敦夫は独力でこれに取り組み、二〇年以上の歳月をかけて完成させます。『万葉集総索引』は本文篇・漢字篇・諸訓説篇・単語篇からなり、今なお研究に必須とされます。苦闘の跡を物語る、短冊帖・自筆原稿・朱入れ校正紙の現物を示しました。（小川）



短冊帖は漢字篇の「タ」冒頭7行×3列、貼り付けた状態。27.0×18.0。



自筆原稿は諸訓説篇。ペン書き、26.6×37.8。



朱入れ校正は単語篇、「タ」冒頭、仮綴じ。27.0×20.5。

コラム C

日本古典全集と与謝野寛・晶子

敦夫畢生の仕事として、六期・二六六点に及ぶ一大叢書、「日本古典全集」の編集刊行が挙げられます。大正一四年（一九二五）九月、第二次『明星』に、与謝野寛・晶子夫妻と敦夫の連名で「「日本古典全集」刊行趣旨」が掲載され、「我国のあらゆる古典中より、一般文化人として、専門の学徒として、必読すべき代表的の書物全部を選択し回を追ひつゝ漸々に刊行します」と宣言、予約者を募ります。敦夫の持論である、古典を信頼できる本文により、かつ廉価で提供せんとする意図から出たものでしたが、折からの「円本ブーム」もあり、有名どころを揃えた第一・二期の一〇〇点は順調に刊行、営業的にも大成功でした。事業は拡大し、昭和二年（一九二七）四月、株式会社日本古典全集刊行会が設立されますが、これは放漫な経営が祟ってすぐ倒産してしまいます。結局、与謝野夫妻は第二期で手を引きます。

しかし、敦夫は編集者の長島豊太郎と協力し、事業を継続します。第三期以後の書目は他の叢書とは異なり、広く語学・芸能・有職故実・本草・医学などの典籍も収録されています。現在もこれでしか活字で読めない文献も少なくありません。白鳥は後年、田舎者の敦夫がいいように利用されたと非難するのですが（『人間嫌ひ』）、古い文献の公刊を使命と観ずる敦夫にとっては、そんなことはどうでもよかったのでしょう。その見識と努力は誠に特筆すべきものです。

（小川）

コラム D

『万葉集総索引』

大学に入学したとき、万葉集研究会というものがあった。そこで一年生ながら歌を調べて発表することになった。先輩たちは、歌を調べるに当たり、辞書などは引いてはならぬ、「ソーサクイン」を引いて調べるのだと私に言った。それが、『万葉集総索引』との出会いであった。この本には、『万葉集』の単語が、一字一音の事例も正訓の事例も、すべて載っていた。四、五〇〇首を超える『万葉集』の歌々の言葉をことごとく把握できるのだという万能感にとらわれたことを覚えている。もう五〇年近く前のことであるが、この本はいまだ机辺にあり、愛用している。しかし、そんな精密な索引は、それよりずっと前に出来上がっていたのであった。正宗敦夫編『万葉集総索引』は、一九二九年には公刊されている。何と、昭和初期にはもう出来ていたのだ。思えば、近代の『万葉集』の研究というものは、諸本を集め、校本（こうほん）を形作った『校本万葉集』（一九二五年）といい、この総索引といい、よくもと言うほど早い時期にその基盤が整備されている。しかし、著名な万葉学者がそろった『校本万葉集』の編者たちとは異なり、本書の編者正宗敦夫その人について、これまで思いをいたしたことはなかった。恥ずかしいことである。今回の展示に合わせて、永らく公刊されていなかった氏の随筆も活字化された（小川剛生編。「主要参考文献一覧」63頁所掲）。こんな素晴らしい本を物した人物は何を考えて生きていたのか、これを機会によくよく知りたいと思う。

（日本女子大学　田中大士（ひろし））

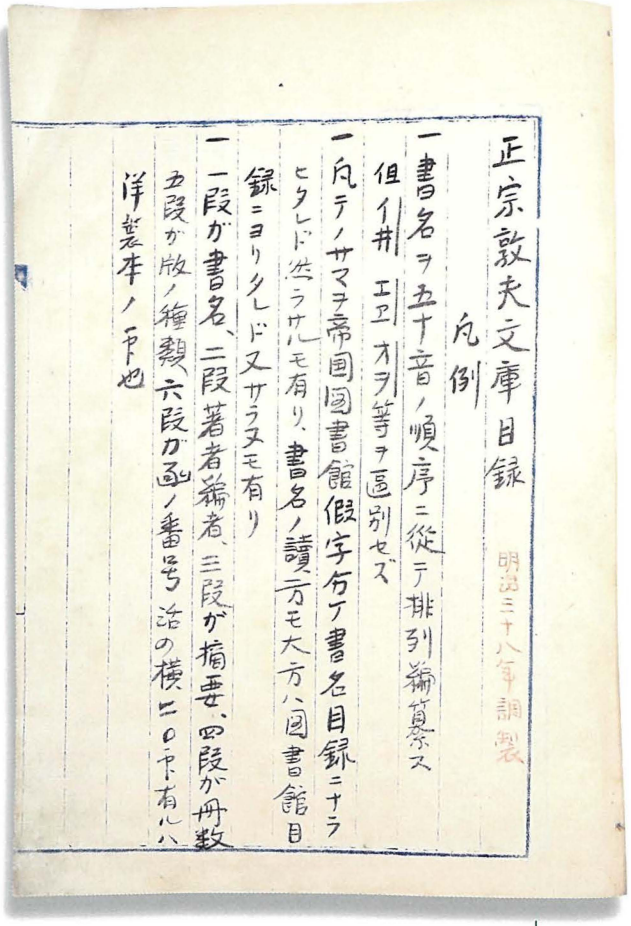
第三部

正宗文庫設立と郷土偉人の著作

敦夫は若い頃から大量の書物を購入していました。地方で学問する者にとり、蔵書の充実は切実な問題でした。公共図書館などない時代です。晩年の随筆で、「どの書籍でも時有つて用が有つて見度(た)い事が出て来る。さうなると是又中々有る物で無い。東京京都なら又工夫も有らうが、田舎ではどうにも成らぬのが実情である。そこで珍書稀書蒐集(しゅうしゅう)もたゞ道楽であると云つて笑つてもゐられぬ。本と云ふ物は有る様で無く、無い様で有る物で、実に不思議千万なもので有る」と述べています。青少年こそ身近に書物が必要と、早くも二四歳の時、自宅に児童図書閲覧所(じどうとしょえつらんじょ)を設置してもいます。

また、敦夫は郷土の学者・歌人の著作を熱心に蒐集しています。多くは写本でした。目利きの彼はしばしば珍本を獲得しますが、それを秘蔵せず、保存し公開することが肝要と考えていました。「何分一部でも多くあつてほしい。いかなる事で何時亡(ほろ)ぶかも知れぬ。天下の孤本などと嬉しがつてゐるべきでない」と憂慮し、「何とか保存の法を講ぜねばなるまい」と繰り返し述べています。

このような理由で、水火の害から書物を護(まも)り、後世に伝える文庫設立の構想を早くから抱いていたようです。昭和一一年(一九三六)、敦夫は自宅近くに鉄筋コンクリートの二階書庫を建て、正宗文庫と命名、財団法人の認可を受けます。文庫は最終的には七、〇〇〇点・二〇、〇〇〇冊の書物を収めるまでになります。もし、正宗文庫が無かったら、郷土文学のかずかずの宝はきっと失われてしまったことでしょう。（小川）



正宗敦夫文庫目録　明治三十八年調製

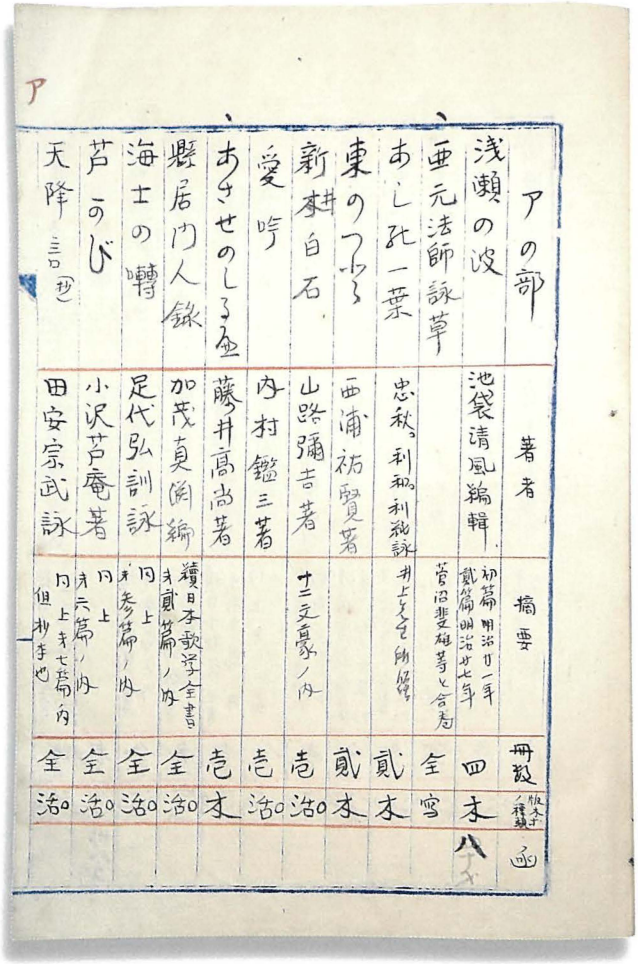
凡例

一書名ヲ五十音ノ順序ニ從テ排列編纂ス

但イ井　エヱ　オヲ等ヲ區別セズ

一凡テノサマヲ帝国図書館假字方ヲ書名目録ニナラヒタレド然ラザルモ有リ、書名ノ讀方モ大方ハ図書館目録ニヨリタレド又サラヌモ有リ

一一段ガ書名、二段著者編者、三段ガ摘要、四段ガ冊数、五段ガ版ノ種類、六段ガ函ノ番号、活ノ横ニ○ヲ有ルハ洋装本ノ印也



ア

ア の部

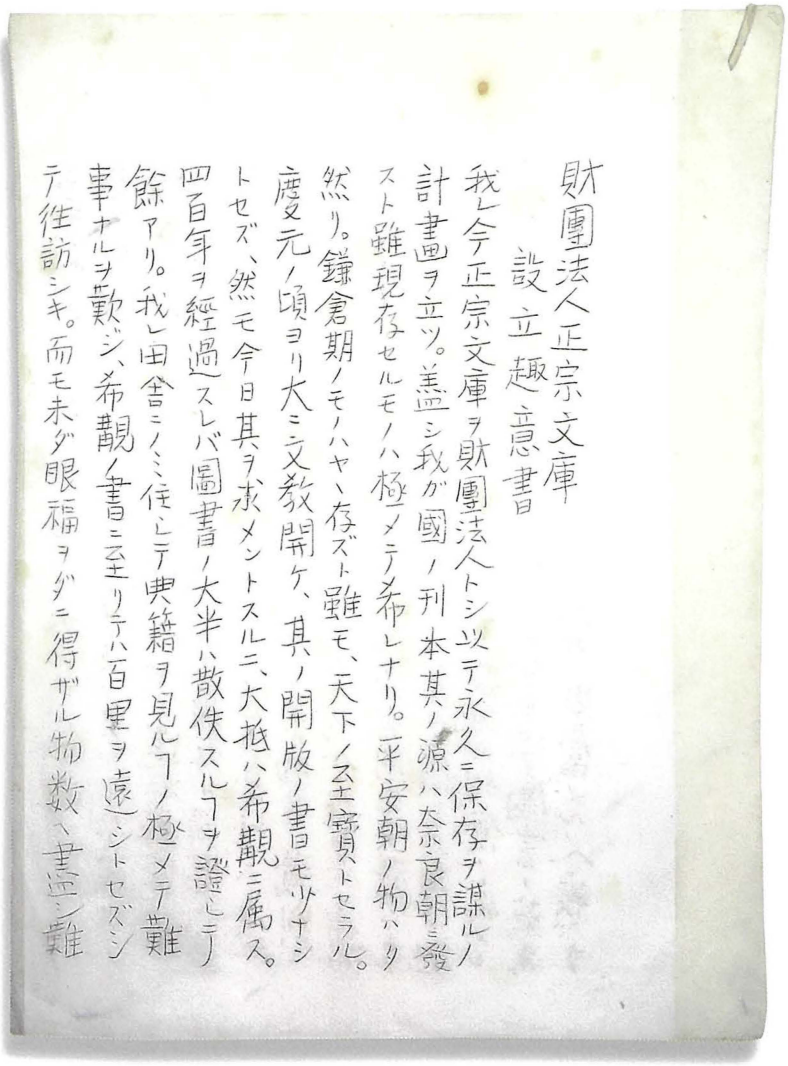
書名	著者	摘要	冊数	版木ノ種類	函
浅瀬の波	池袋清風編輯	初篇明治廿一年 戴篇明治廿七年	四	木	八
亜元法師詠草		菅沼斐雄等ト合著	全	宮	
あし孔一葉	忠秋、利和、利義詠	井上文雄編	貳	木	
東のつゆ	西浦祐賢著		貳	木	
新耕白石	山路彌吉著	十三文豪ノ内	壱	活○	
愛吟	内村鑑三著		壱	活○	
あさせのしるべ	藤井高尚著		壱	木	
懸居内人録	加茂真淵編	續日本歌学全書 第貳篇ノ内	全	活○	
海士の囀	足代弘訓詠	同上 第参篇ノ内	全	活○	
芦のび	小沢芦庵著	同上 第六篇ノ内	全	活○	
天降 三ロ(丑)	田安宗武詠	同上 第七篇ノ内 但抄ナリ	全	活○	

3－1

正宗敦夫文庫仮字目録

蔵書を公開して、図書室を開く

敦夫は明治三七年（一九〇四）、「児童（少年）図書閲覧所」を開設します。地域の子供に読書の習慣を身に付け、文芸に開眼して欲しいとの願いから出たものでした。その翌年に編んだ、この手書きの蔵書目録は、書名のアイウエオ順に掲載されており、児童図書閲覧所とも関係するのでしょう。二〇歳を過ぎたばかりで、蔵書の公開と活用を思い立ち、すぐに実行した先見性と行動力には驚かされます。（小川）



財團法人正宗文庫
設立趣意書

我レ今正宗文庫ヲ財團法人トシ以テ永久ニ保存ヲ謀ルノ計畫ヲ立ツ。蓋シ我ガ國ノ刊本其ノ源ハ奈良朝ニ發スト雖現存セルモノハ極メテ希レナリ。平安朝ノ物ハタ然リ。鎌倉期ノモノハヤヽ存ズト雖モ、天下ノ至寶トセラル。慶元ノ頃ヨリ大ニ文教開ケ、其ノ開版ノ書モツナシトセズ、然モ今日其ヲ求メントスルニ、大抵ハ希覯ニ屬ス。四百年ヲ經過スレバ圖書ノ大半ハ散佚スルヲヲ證シテ餘アリ。我レ田舍ニノミ住シテ典籍ヲ見ルヲノ極メテ難事ナルヲ歎ジ、希覯ノ書ニ至リテハ百里ヲ遠シトセズシテ往訪シキ。而モ未ダ眼福ヲダニ得ザル物數ハ蓋シ難

正宗文庫

正宗文庫

正宗文庫

※日本書誌学大系103（2）『増訂　新編蔵書印譜』中（青裳堂書店）

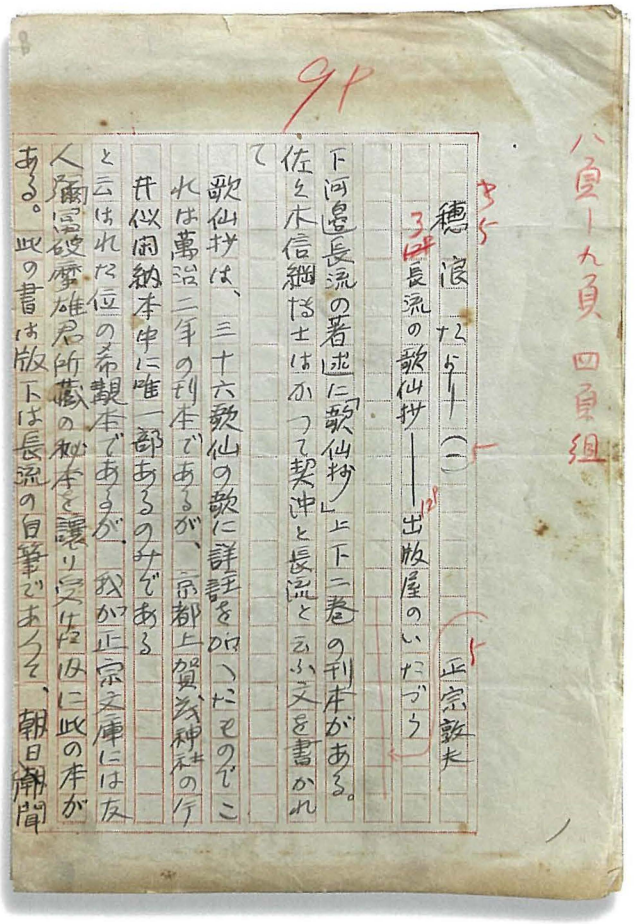
3－2

財団法人正宗文庫設立趣意書

安全な穂浪の地に文庫を建て、書物を護る

財団法人としての設置目的は「図書其ノ他美術品考古参考品ノ蒐集及閲覧公開」でしたが、趣意書で「我ガ此ノ文庫ヲ建設セル精神ハ、此ノ文庫ノ図書ガ、我ガ子孫ニ常ニ新ナル力ヲ発生セシムル源タルベキヲ信ジテナリ」と、文庫がこの土地で子孫と共にあることを願っています。その遺志を息甫一・孫千春と継承し、現在に至ります。文庫設立に関する資料も示しました。文庫印は著名な鋳金家、香取秀眞（一八七四～一九五四）の作です。

（小川）

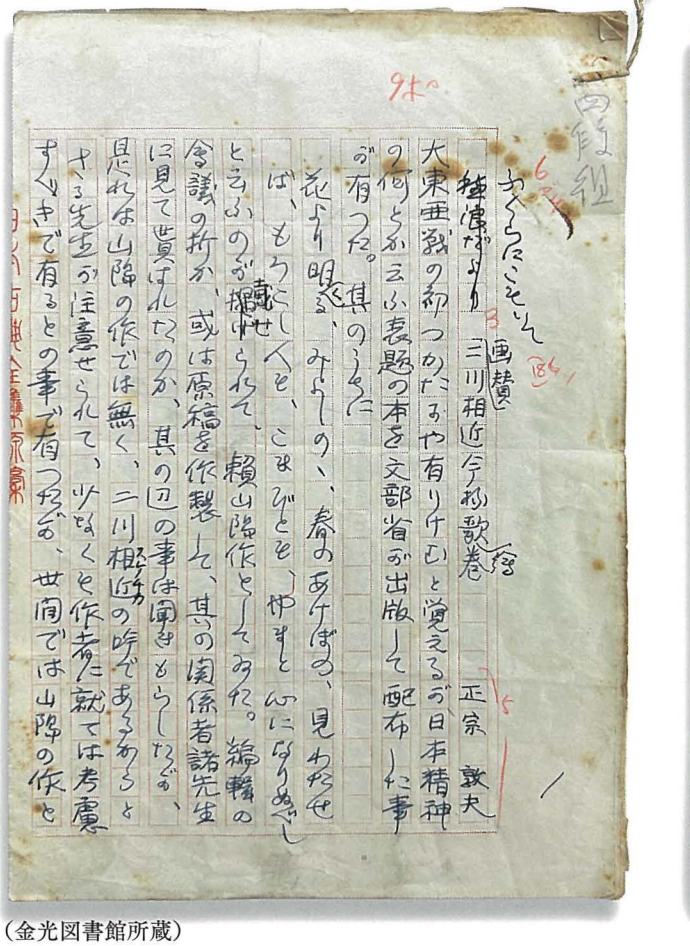


穂浪だより（一）　正宗敦夫

長流の歌仙抄――出版屋のいたづら

下河邊長流の著述に「歌仙抄」上下二巻の刊本がある。佐々木信綱博士はかつて契沖と長流と云ふ文を書かれて歌仙抄は、三十六歌仙の歌に詳註を加へたものでこれは萬治二年の刊本であるが、京都上賀茂神社の斧井似閑納本中に唯一部あるのみである

と云はれた位の希覯本であるが、我が正宗文庫には友人關西渡雲雄君所藏の秘本を譲り受けた由に此の本がある。此の書は版下は長流の自筆であつて、朝日新聞



ふぐらにこもりて　正宗敦夫

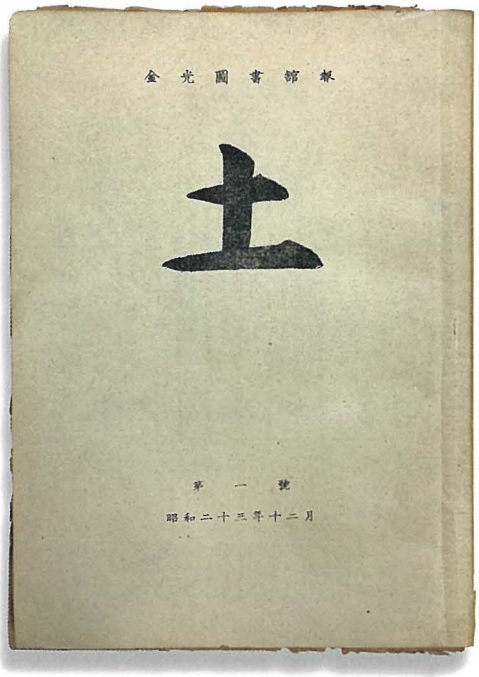
種浪だより　二川相近今様歌巻　画賛

大東亜戦の初つかたなりや有りけむと覚えるお日本精神の何とか云ふ表題の本を文部省が出版して配布した事が有つた。其のうちに

花より明る、みよしの、、春のあけぼの、見わたせば、もろこしくも、こまびとも、ゆめとこころもしくもなりぬべし

とふのが載せられて、頼山陽作としてあつた。編輯の会議の折か、或は原稿を作製して、其の関係者諸先生に見て貰はれたのか、其の辺の事は聞きもらしたが、思へば山陽の作では無く、二川相近の吟であるとやうな先生が注意せられて、少なくとも作者に就ては考慮すべきで有るとの事で有つたが、世間では山陽の作と

（金光図書館所蔵）



金光圖書館報

土

第一號

昭和二十三年三月

3－3

「穂浪だより」「ふぐらにこもりて」原稿（写真）

戦後に書き続けられた、隠れた名随筆

敦夫は戦後、金光図書館報『土』に、「穂浪だより」「ふぐらにこもりて」と題した随筆を四一回に亘り連載しました。その内容は文庫所蔵の貴重典籍の紹介、岡山の儒者・歌人の伝記考証、自身の研究の話題などです。自筆原稿は金光図書館に大切に保存されていました。研究上の知見に富みますが、筆致は淡々として、時にユーモラスであり、随筆としても味わい深いものです。（小川）

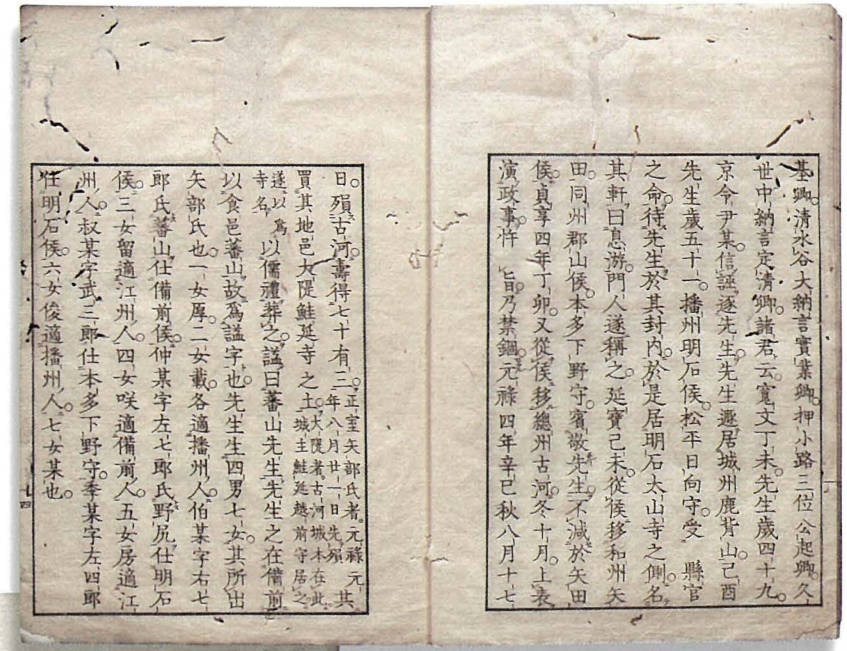
3-4

卜養狂歌集

藩主の趣味で作られた特注本の狂歌集

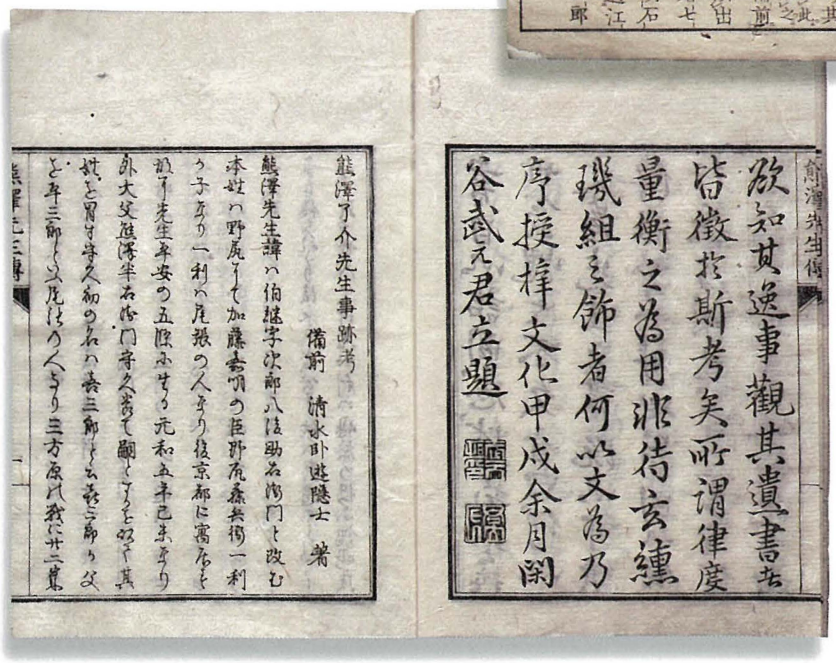
半井卜養（一六〇七～七八）とは当時人気があった江戸の狂歌師で、その作品は諸大名も争って求めたといいます。この本は寛文一〇年（一六七〇）、岡山藩第二代藩主・池田綱政（一六三八～一七一四）の筆、狩野素閑（玉信か）に絵を描かせた一巻です。綱政はかなりの趣味人で、それを偲ばせる逸品です。また出版されて流布した本とは内容が異なり、資料としても価値があります。

（小川）



3-5

蕃山先生の伝記に学ぶ



3-6

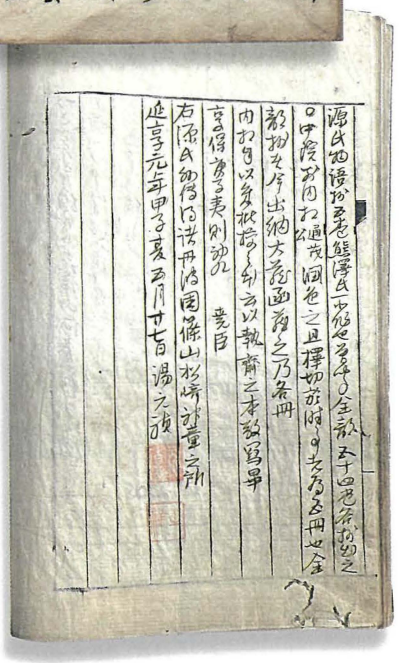
3-5 蕃山先生状

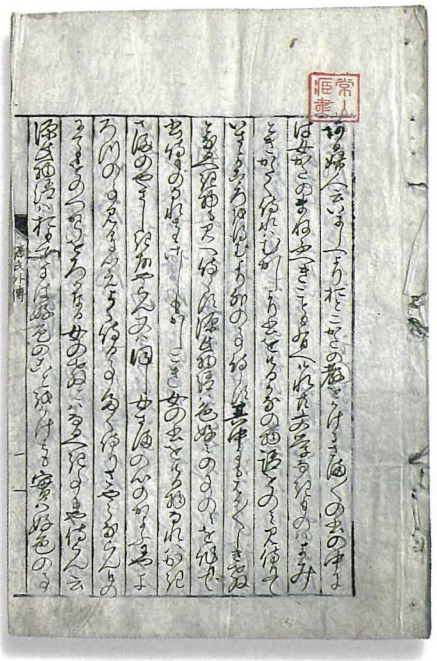
岡山藩の儒学者であった熊沢蕃山の伝記で、天明七年(一七八七)に刊行されました。草加定環の跋文によれば、蕃山の生涯が詳らかでないことを訴える人々の求めに応じて整理されたものとのことで、主要な事績が簡潔にまとめられています。敦夫は師の井上通泰とともに、数十年にわたって蕃山の研究を続け、後に『蕃山全集』を刊行しました。（丸井）

3-6 熊澤了介先生事跡考

備前の清水臥遊の手になる熊沢蕃山の伝記です。蕃山は三九歳で岡山藩を追われ、敦夫の生地のすぐ近く、和気郡寺口村(現備前市蕃山)に隠棲しました。「了介」はこのとき用いた字です。この地にいた期間は長くありませんが、死後一〇〇年以上経過した文化八年(一八一一)に本書が刊行されていることからも、備前の人が蕃山をどれほど大切に思っていたかが窺われます。（丸井）

3-7





3-8

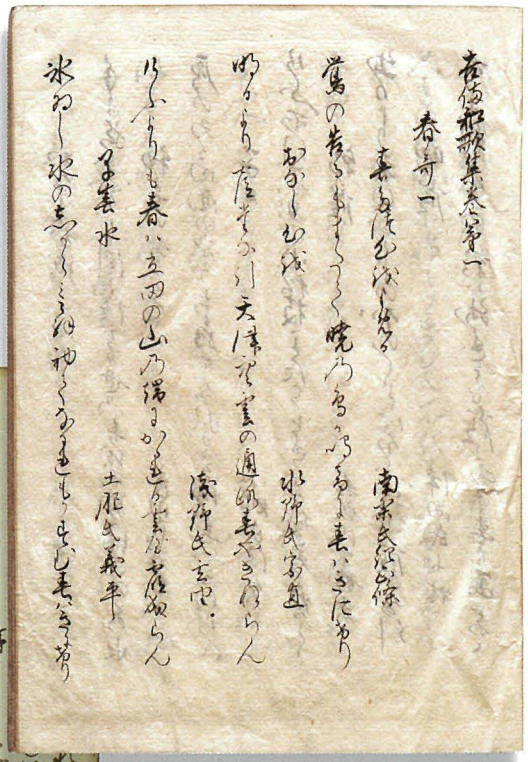
蕃山先生の著作に学ぶ

熊沢蕃山の主著というべき随想録で、寛文一二年（一六七二）に刊行されました。江戸時代には一六巻本が流布しましたが、正宗文庫所蔵本は「書簡」五巻と「義論」六巻の一一巻で構成される初版本です。「書簡」では学問・政治などの話題が往復書簡の形式で論じられ、「義論」では義理についての論が展開されています。本書は備前酒折宮（現・岡山神社）旧蔵本。岡山藩士の竹村梅隠によって奉納されました。（丸井）

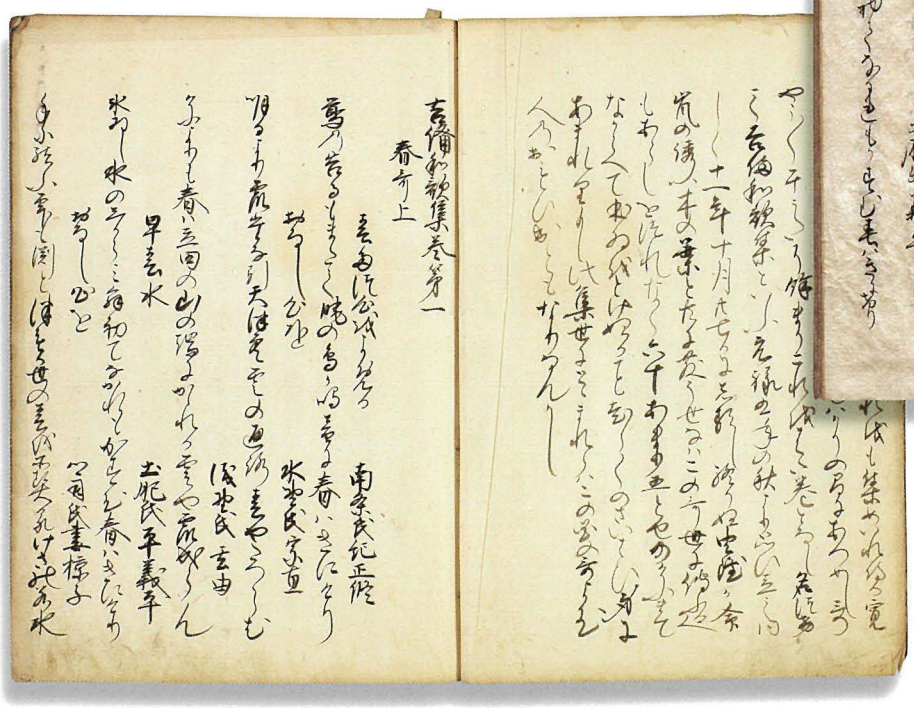
3-7 集義和書

熊沢蕃山が延宝五年（一六七七）ごろに著した『源氏物語』の注釈書で、「桐壺」から「藤裏葉」までの巻が儒教的な観点から解説されています。儒学者が日本の古典、しかも仮名で書かれた恋の物語を論じるのは、きわめて珍しいことでした。しかもこの本は、岡山藩士の湯浅常山が筆写したものです。珍本中の珍本といってよいでしょう。（丸井）

3-8 源氏外伝



3-9



3-10

3-9 吉備和歌集（浅野由隆編）

岡山和歌史の至宝 敦夫が大切に保存してくれました

『吉備和歌集』は、岡山の一一三人の和歌一四四七首（巻末記載に拠る）を収めた私撰和歌集です。京都在住の地下歌人香川宣阿が撰し、岡山藩士の浅野由隆が編集して元禄一一年（一六九八）に成立しました。元文二年（一七三七）三月、石丸定良写。巻頭は南条正修、巻軸は浅野由隆。伝本は、正宗文庫所蔵の写本二本と岡山大学池田家文庫蔵『備陽記』所収本の計三本が知られます。

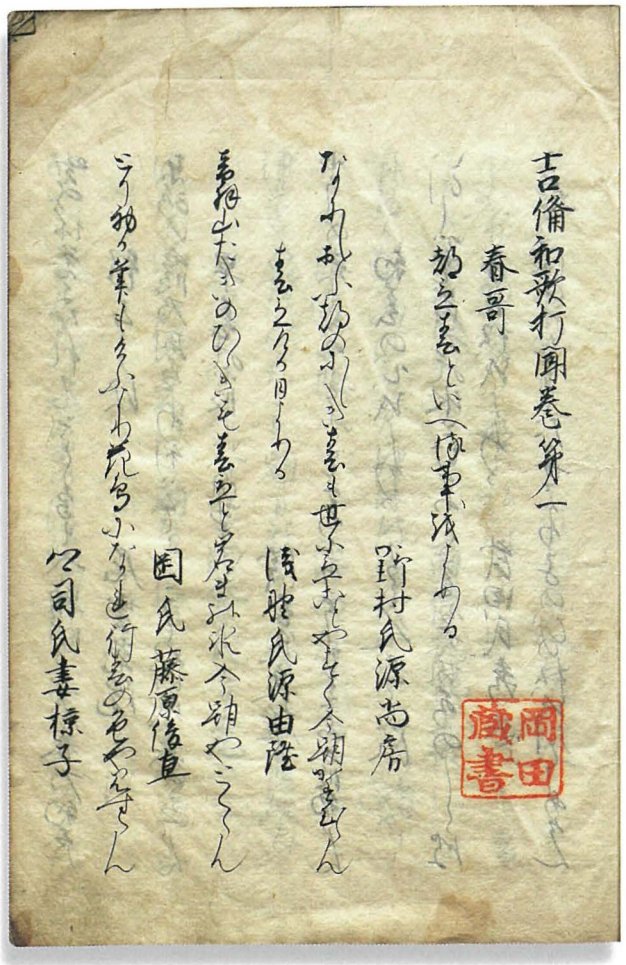
（小川・神作）

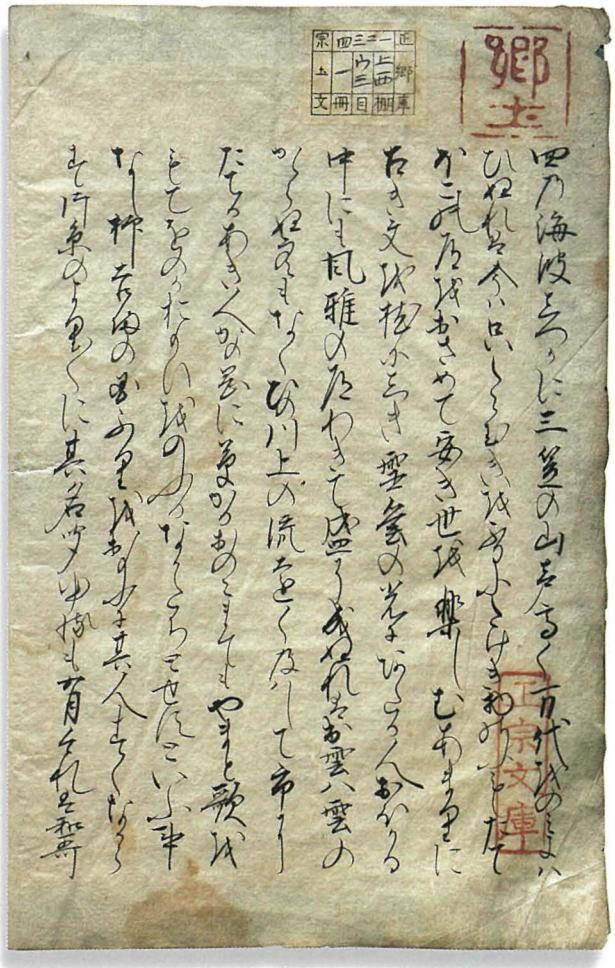
3-10 吉備和歌集（浅野由隆編）

存巻一～一〇

もう一本、こちらのほうが善本です

前掲本よりも善本ですが、巻一〇までの残闕本であるのが惜しまれます。〔江戸中期〕写。半紙本一冊。巻頭歌は、「春たつ心をよめる」との題で「鶯の告るもまたで暁の鳥が鳴音に春はきにけり」（南条氏紀正修）。（神作）





3-11

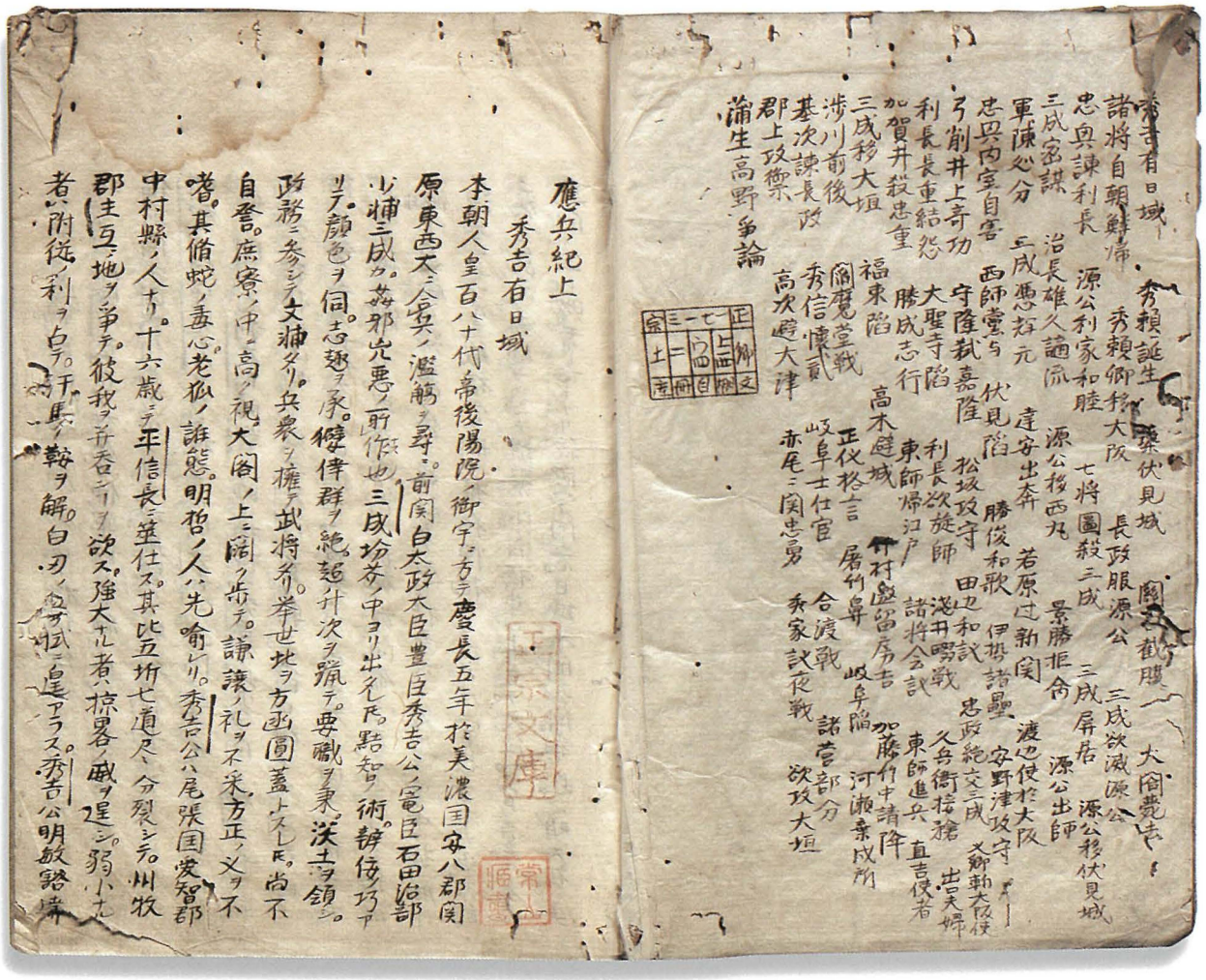
吉備和歌打聞（岡俊直撰）

＊存巻一～四

神官岡俊直による、知られざる私撰和歌集

備前酒折宮（現岡山神社）の神官で、香川宣阿門の岡俊直撰。四巻。〔江戸中期〕写。大本一冊。正徳二年（一七一二）序。『吉備和歌集』に続く、岡山歌人たちの私撰和歌集です。巻頭歌は、「都立春といへる事をよめる」との題で「なにしおふ都のにしき春も世に立ことやすく今朝かすむらん」（野村氏源尚房）。野村尚房は備中鴨方藩士で香川宣阿門。印記「岡田／蔵書」により、実業家岡田真の旧蔵書と知られます。孤本。

（神作）



3－12

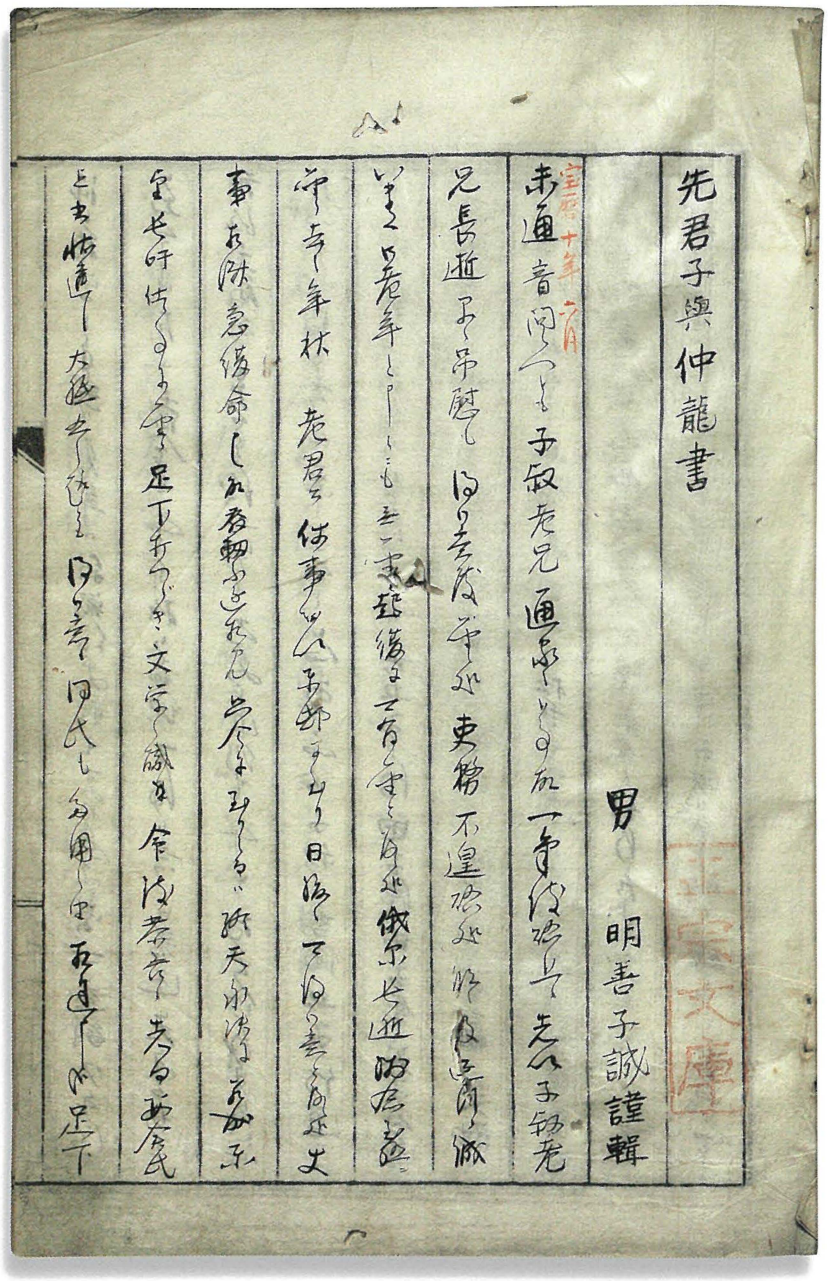
応兵記

（熊沢淡庵著。湯浅常山筆）

戦国武将の逸話に加評した珍本です

岡山藩に仕えた熊沢淡庵（一六二九～九一）は、江戸時代後期に流行した戦国武将の言行録『武将感状記』の著者です。『応兵記』は淡庵が関ケ原の戦いをテーマに各武将の逸話を筆録し、評を加えたもので、国内に二本しか伝来しません。また、本書は『常山紀談』（3－16／3－17）の著者湯浅常山が自ら書写したものでもあり、敦夫が最も珍蔵したものの一つです。

（竹内）

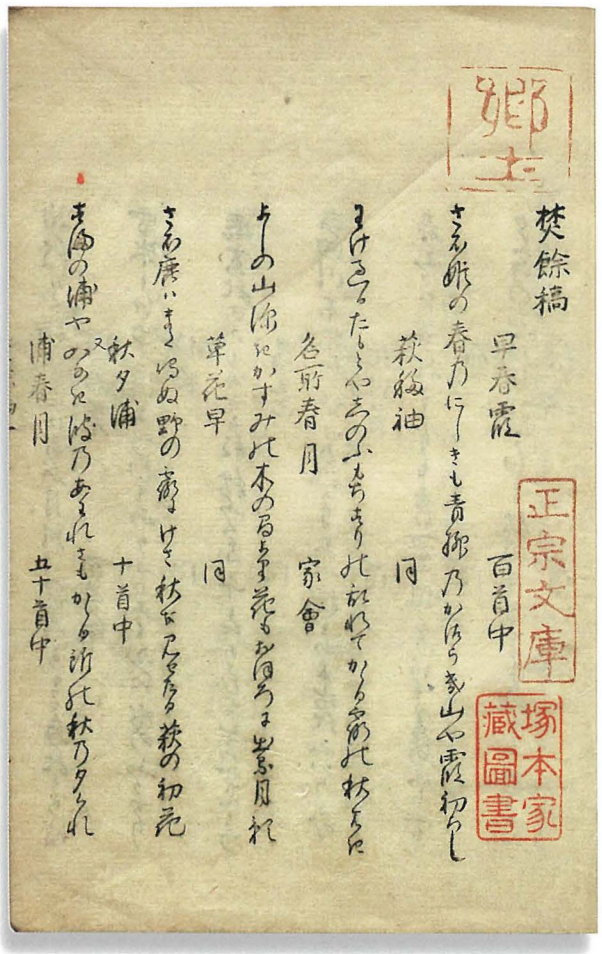


3-13

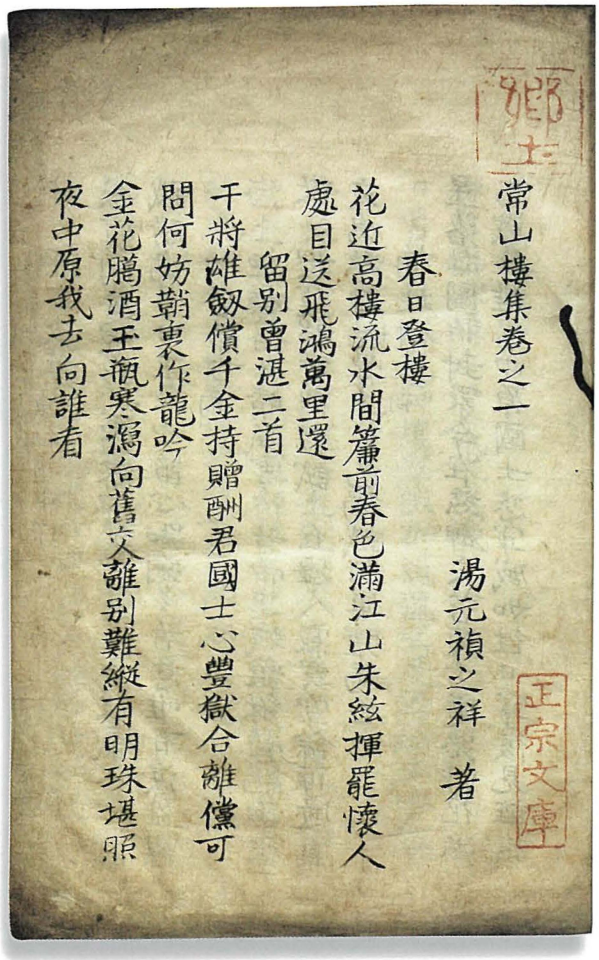
先君子与仲龍書（湯浅明善編）

研究資源としての湯浅常山書簡

湯浅常山（一七〇八～八一）が同僚の儒者・井上四明（仲龍）に寄せた書簡を集めたものです。長文で記された各書簡からは、師の服部南郭や太宰春台らとの交流に端を発する常山の思想が窺えます。正宗文庫には常山の子明善が自ら記したものが伝わっており、敦夫は「常山研究資料として非常に有益なものであり、読んで興味津々たるものが少なくない」と評しています。（竹内）



3-14



3-15

3-14

焚余稿

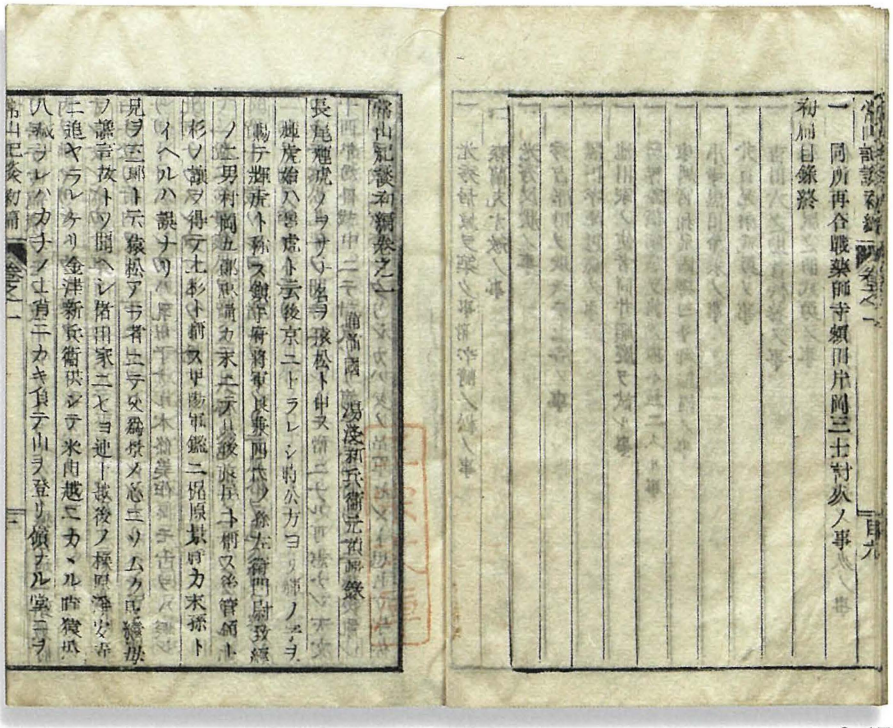
3-15

常山楼集 巻一（自筆）

和歌と詩文に常山のしなやかさを知る

『焚余稿』と『常山楼集』はいずれも湯浅常山の手になるもので、前者は和歌集、後者は詩文集です。天明七年（一七八七）刊行の『焚余稿』は、岡山市立中央図書館（湯浅明善旧蔵）と正宗文庫（塚本吉彦旧蔵）にのみ伝来する珍本です。また、『常山楼集』に関しては常山自筆本が伝来しています。常山の歴史趣味や上方の文人との交流が窺える点で、たいへん貴重なものです。（竹内）

3-16



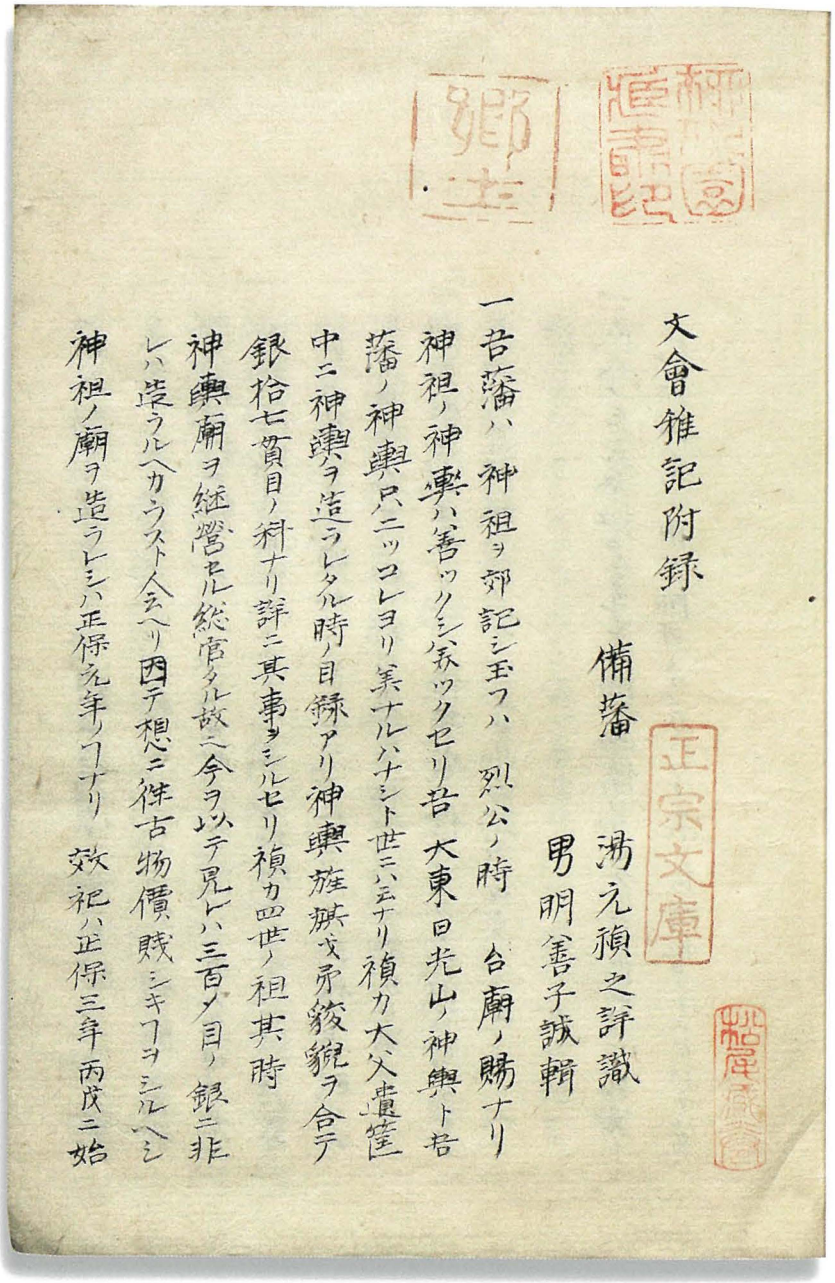
3-17

貴重な常山の自筆稿本です

3-16『常山紀談』は歴史上の名将の逸話を集め、著者である湯浅常山の死後「武家必用の珍書」として出版されました。この本は常山自筆の書き入れを備えた稿本と考えられ、推敲の過程が窺える貴重な資料です。岡山在住の歴史家・塚本吉彦氏の家に巻四のみが伝わり、同氏が岡山の古本屋で巻一、二を偶然に発見して購入、その後に敦夫に譲られました。

3-17　木活字を用いた『常山紀談』の刊本で、近世後期から明治期のものと見られます。（野澤）

3-16	常山紀談
3-17	常山紀談



文會雜記附録

備藩　湯元禎之評識
男明善子誠輯

一昔藩ハ神祖ヲ郊記シ玉フハ　烈公ノ時　台廟ノ賜ナリ
神祖ノ神輿ハ善ツクシ美ツクセリ昔　大東日光山ノ神輿ト昔
藩ノ神輿只二ツコレヨリ美ナルハナシト世ニ云ナリ禎カ大父遺筐
中ニ神輿ヲ造ラレタル時ノ目録アリ神輿旌旗弓矢鞍貌ヲ合テ
銀拾七貫目ノ科ナリ詳ニ其事ヲシルセリ禎カ四世ノ祖其時
神輿廟ヲ経營セル総官タル故ニ今ヲ以テ見レハ三百メ目ノ銀ニ非
レハ造ラルヘカラスト云ヘリ因テ想ニ徠古物價賤シキヲヲシルヘシ
神祖ノ廟ヲ造ラレシハ正保元年ノコトナリ　效祀ハ正保三年丙戌ニ始

3-18

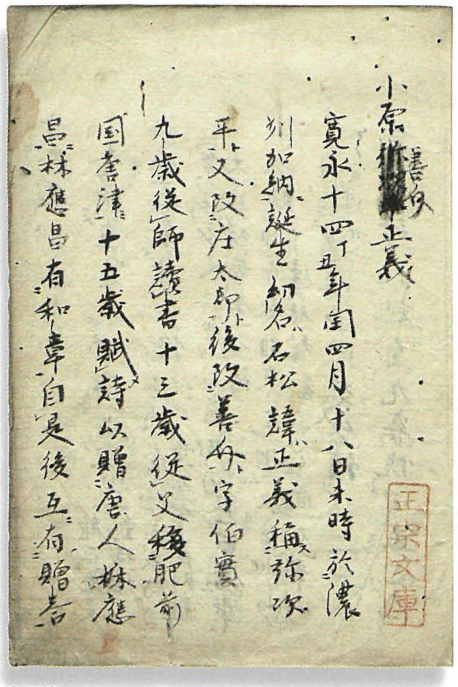
文会雑記

（湯浅常山著、明善校写）

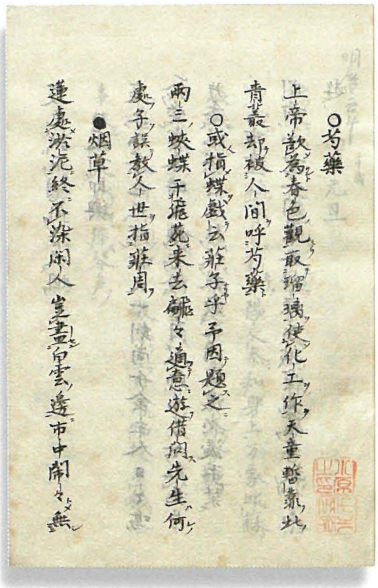
岡山学芸史の好資料でもあります

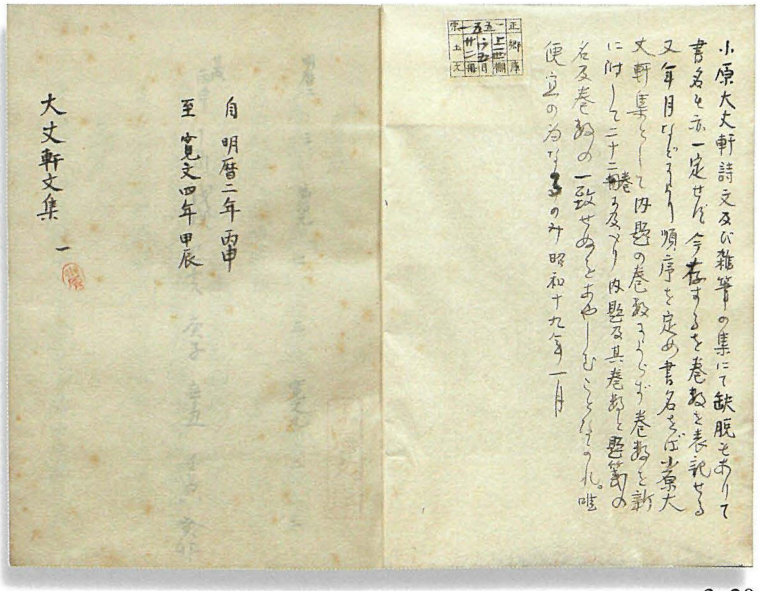
湯浅常山は岡山藩に仕えた儒学者で、藩命によって江戸に行き、服部南郭に師事しました。『文会雑記』は、南郭のほか、荻生徂徠、太宰春台、伊藤仁斎など名だたる儒学者の逸話を集めた随筆です。また、熊沢蕃山をはじめ、岡山で活躍した人物についての記事も見えます。中でも第五冊「附録」には岡山藩に関する記述が目立ち、「烈公」（芳烈公池田光政）時代の逸話を複数収録しています。

（野澤）



3-19





3-20

名儒大丈軒の自叙伝

大丈軒こと小原正義（一六三七～一七一二）は、美濃加納の生、京都遊学後、池田光政に侍講として招かれた儒学者です。知名度は蕃山や常山に劣りますが、岡山藩の文教に尽くしました。この年譜は正義が自らまとめたもので、江戸前期の知識人の自伝としても読めます。敦夫は正義に傾倒、森鷗外の史伝小説に倣い、伝記を書こうとしていました。集めた資料に正義の詩集もあります。

（小川）

3－19	大丈軒譜
3－20	大丈軒集

コラム E

熊沢蕃山

元和5年(1619)～元禄4年(1691)

熊沢蕃山が岡山藩主池田光政に重用され、治水等の実務にも見識を持ち、また、藩内儒学の指導者でもあったことは、よく知られているだろうと思います。彼は京都生まれで、譜代の家臣ではありませんので、彼が最終的に与えられた三、〇〇〇石の番頭（家老に次ぐ格です）という破格の地位は、ひとえに藩主の彼への信頼にかかるものでした。

彼の岡山藩での主な実務は、正保二年（一六四五）二七歳から明暦三年（一六五七）三九歳までのわずか一二年に限られ、引退した彼は、やがて京都に帰り、幕政に関わる策を書いたことにより、下総（茨城県）古河城内に幽閉され、元禄四年（一六九一）七三歳で没しました。

彼が単に「儒学者」ではなく「経世家」と呼ばれることのほうが多いのは、このように彼の思想が、思想の枠内にとどまらない、時務実務と一体のものであったことが主な理由でしょう。また、そうした彼が取り入れた思想的立場は、儒学の中でも「知行合一」（思想と行動の一体）のキーワードで知られる、中国の王陽明の流れをくむ立場でした。

思想家であり経世家という彼のあり方は、明治の新しい世になっても尊敬され続けたようで、彼に関する本や論説がたくさん出ています。正宗敦夫が師事した井上通泰も多くの事実を明らかにし、敦夫は師と地元のゆかりから『蕃山全集』（昭和一五年〈一九四〇〉～同一八年〈一九四三〉）を編纂発行しました。（山本）

コラム F

湯浅常山

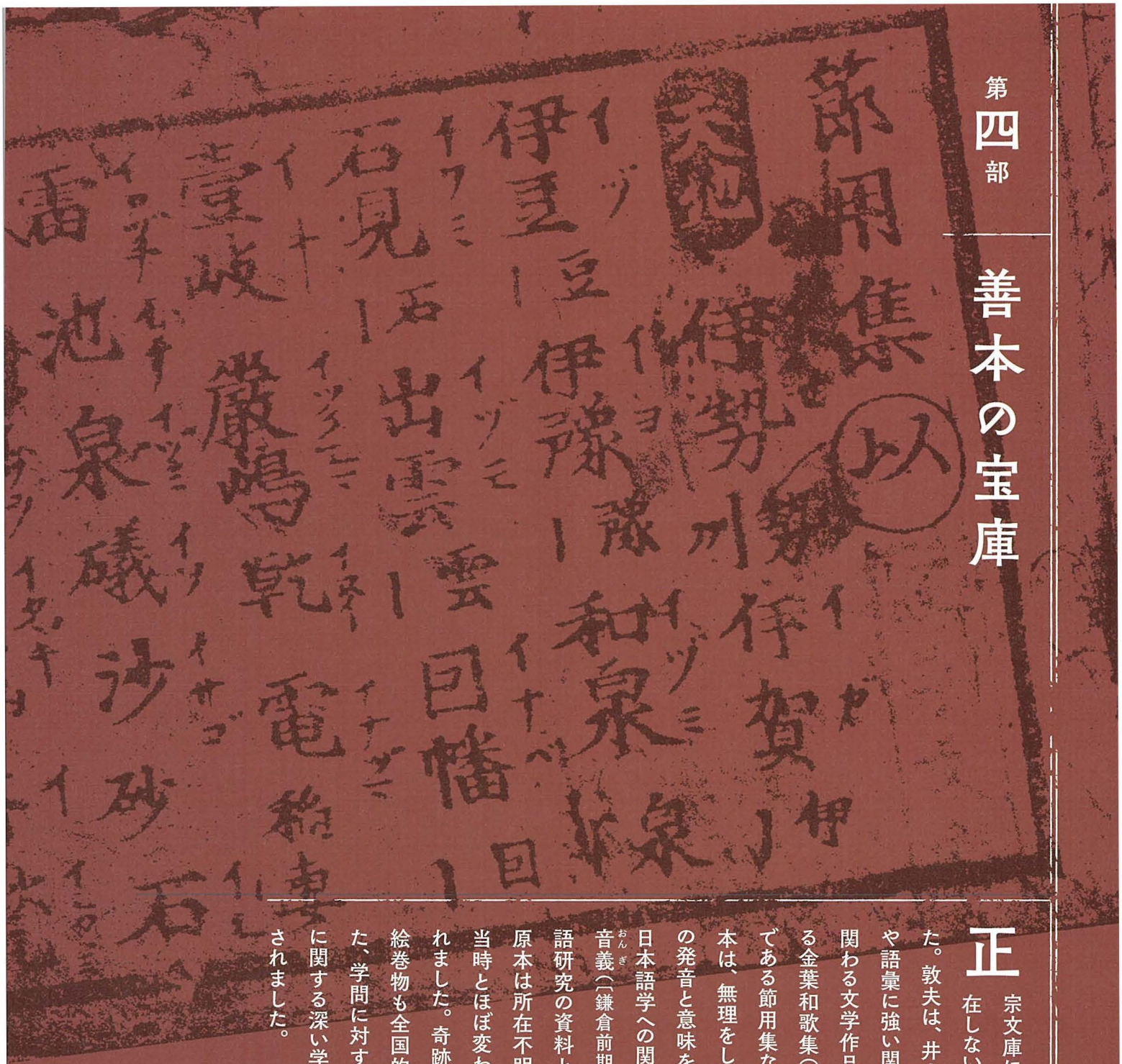
宝永5年(1708)～安永10年(1781)

岡山藩に仕えた湯浅常山は、二〇代で江戸に出て荻生徂徠一門の服部南郭について古文辞学を学び、のちに重臣として藩政に従事しました。たびたび江戸に出張し、太宰春台や井上蘭台などと交流しましたが、実直な人柄が災いして讒言により失脚してしまいます。蟄居を命じられた後は自宅に籠って著述に専念し、戦国時代の武将の逸話を収録した『常山紀談』、古文辞学派の足跡を伝える『文会雑記』などを著しました。特に常山の死後に刊行された『常山紀談』は江戸時代・明治時代を通じて版を重ね、当時のベストセラーとして全国的に愛読されました。

徂徠が「学問は歴史に極まり候」(『徂徠先生答問書』)と述べた通り、古文辞学派の興味は主に歴史に注がれました。徂徠が中国史に研究上の視座を置いたこともあり、古文辞学派の興味は中国史に注がれがちでしたが、常山の興味は専ら日本史に注がれました。常山は「わが国の古き書を読まずば、いかでか此日本の万国にすぐれて貴き事をしるべき」(『松の落葉』)と述べ、日本史を研究の基盤とし、著述に励んだことが知られます。

常山を敬愛した正宗敦夫は常山の自筆本および関連書籍だけでなく、書簡や詩の自筆稿に至るまで常山の遺稿を蒐集しました。いずれも伝来がほとんど確認されていない珍本ばかりで、当該分野の研究史上において、きわめて貴重なものばかりです。

(竹内)

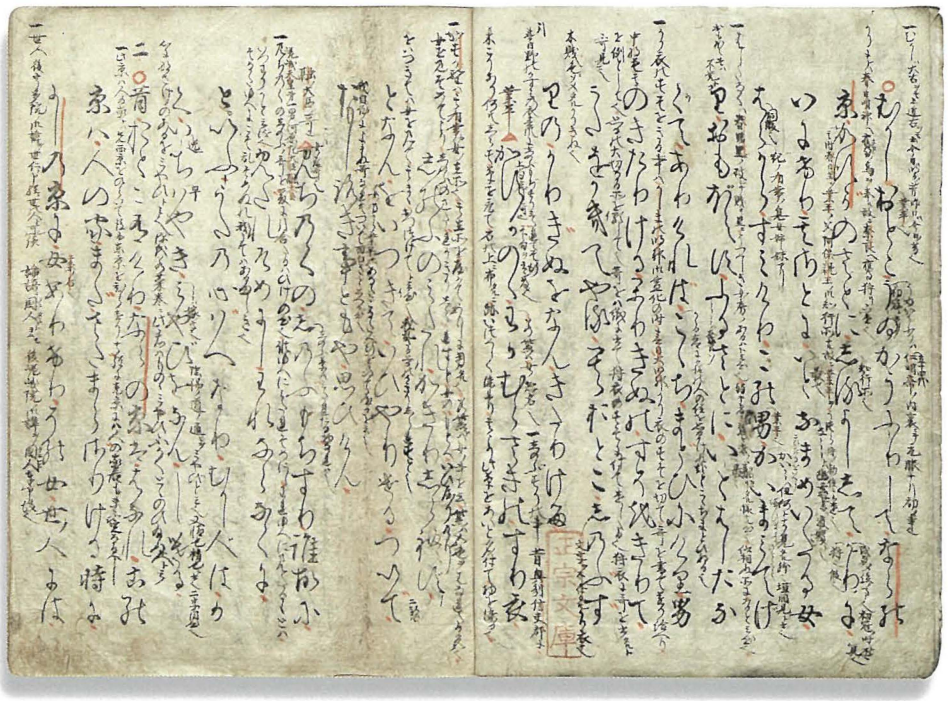


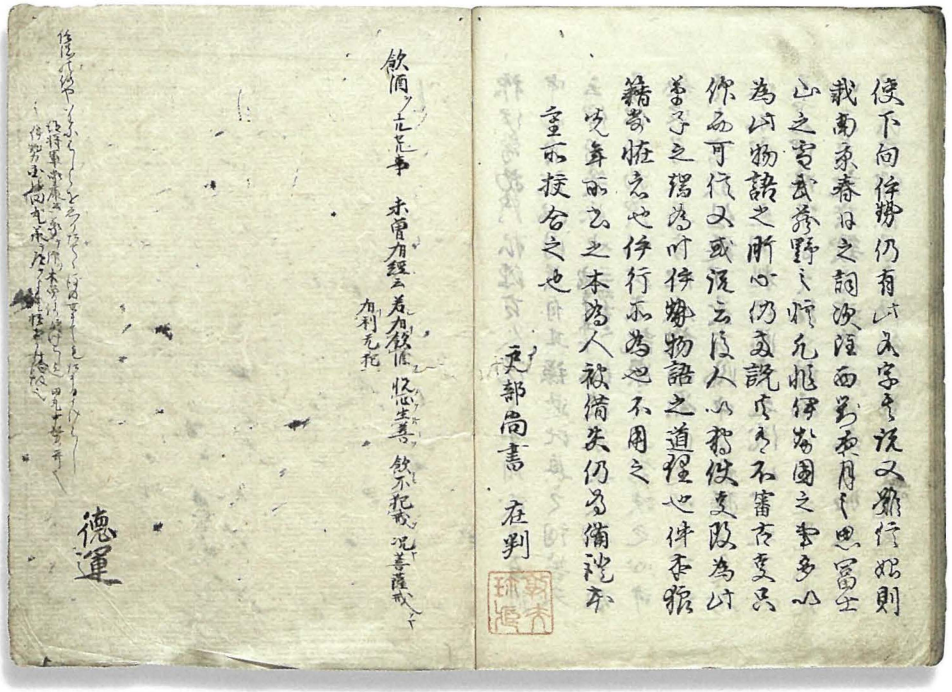
第四部

善本の宝庫

正宗文庫には岡山ばかりでなく、全国的に見ても他に存在しない、貴重な古典籍が収蔵されるようになりました。敦夫は、井上通泰の教えもあり、語格、つまり古代の文法や語彙に強い関心を持っていました。そこで日本語学と深く関わる文学作品、万葉集のほか、第五番目の勅撰和歌集である金葉和歌集（俗語を多く用いた和歌が多い）、室町時代の辞書である節用集などにも研究は拡がり、関係する作品の古い写本は、無理をしてでも購入していました。経典の漢字や語彙の発音と意味を記した、仏書の音義書が収蔵されているのも、日本語学への関心からでした。今回、国文研の調査で倶舎論音義（〔鎌倉前期〕写）が再発見されました。昭和初期に日本語研究の資料として京大国文研究室で模本が作られた後、原本は所在不明でした。七〇年以上の時を経て、その原本が当時とほぼ変わらない良好な状態で存在することが確認されました。奇跡といってよいでしょう。そのほか、数点しかない絵巻物も全国的に注目される美本、稀本ばかりです。こうした、学問に対する真摯な姿勢と旺盛な探求心、古典籍全般に関する深い学識と鋭い審美眼によって、善本の宝庫が形成されました。

（川崎）



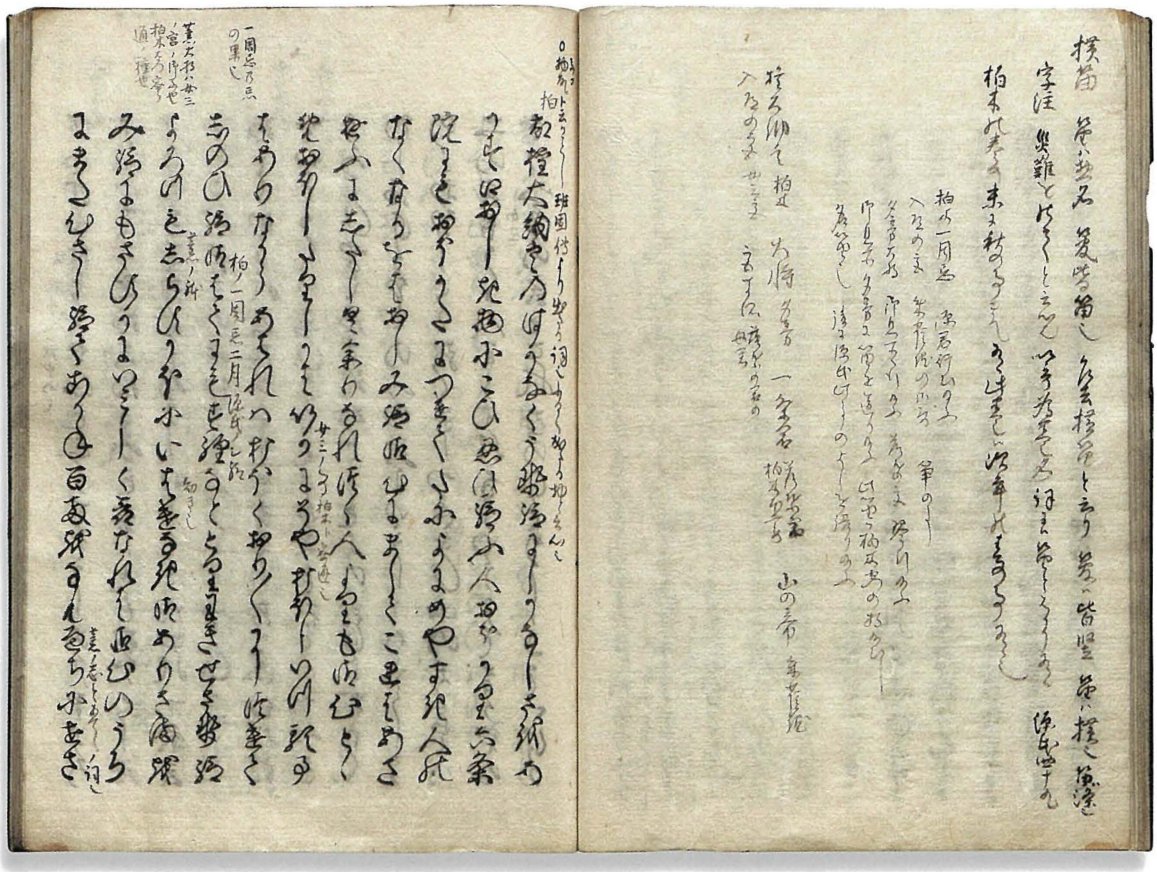


4－1

嵯峨本伊勢物語

嵯峨本もあります

嵯峨本とは、活字を使用して印刷された近世初期の美しい本のことです。嵯峨本『伊勢物語』は、挿絵入り（絵は整版）のものが有名ですが、本書には、挿絵がありません。後ろ表紙見返しに見える「徳運」という人が全巻にわたって細かい字で注を書き入れています。「徳運」は他にも複数の古活字版に書き入れを行っていますが、本書でもほぼ同時代の武将・田丸直昌の和歌を書き込んでおり、注も含めて興味深い本です。（新美）



4－2

古活字版　源氏物語

日本古典全集『源氏物語』の底本です

『源氏物語』の古活字版には、慶長年間の伝嵯峨本、元和九年（一六二三）刊本、寛永刊本がありますが、本書は寛永年間（一六二四～一六四三）に刊行された古活字版です。正宗敦夫が関わった日本古典全集『源氏物語』の底本でもあります。多数の注が書き込まれていますが、連歌師紹巴の作成した『紹巴抄』という『源氏物語』の注釈書をもとに独自注も施しているようで、興味深い本です。（新美）

4-3

こあつもり

伝統的な大和絵とは異なる、素朴な画風の絵巻物

『平家物語』巻九「敦盛最期」のその後を語る、室町物語の人気作です。平敦盛が熊谷次郎直実に討たれる場面から始まり、遺児の小敦盛が法然上人に育てられて母と再会し、敦盛の亡霊に会って出家するまでが語られます（本書は後欠）。伝統的な大和絵とは異なる、素朴な画風の絵巻です。こうした素朴な絵は美術史でも注目されています。（川崎）

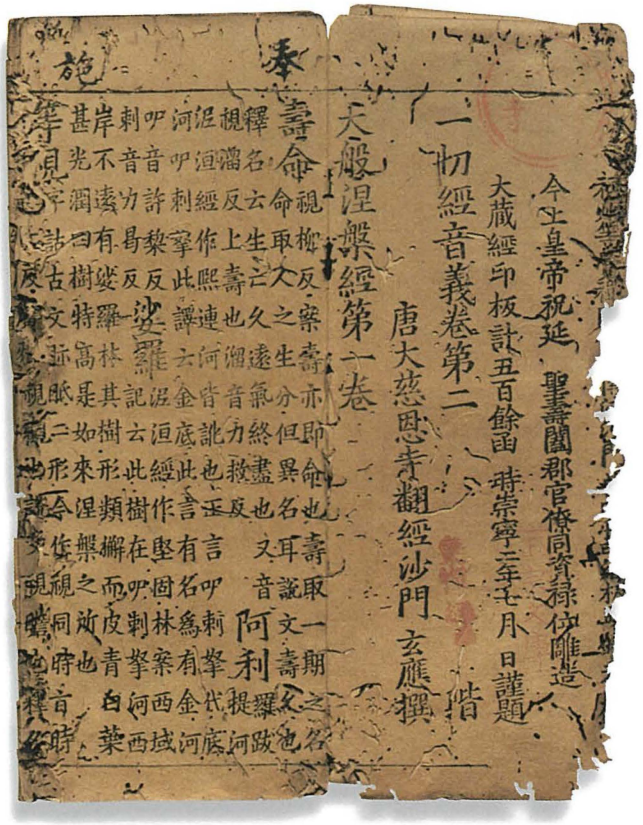
4-4

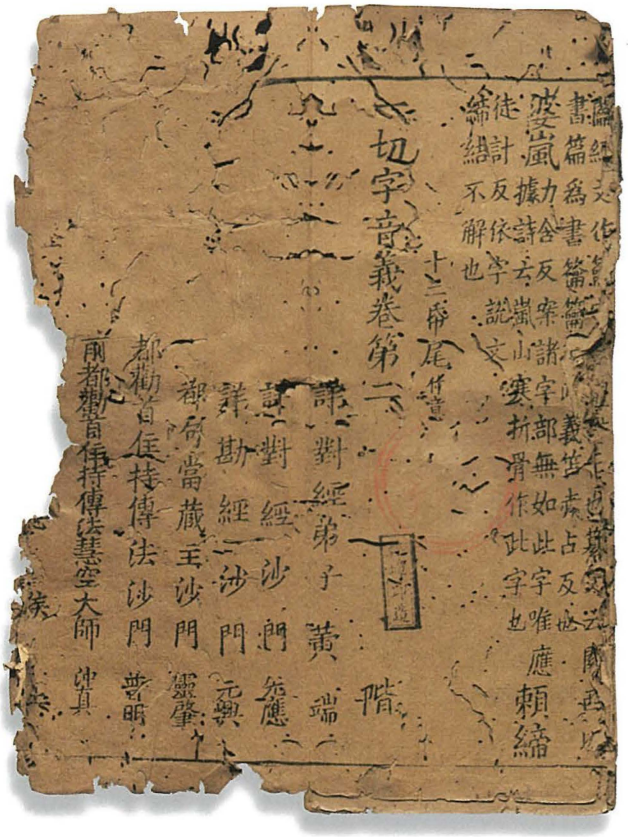
もみぢがり

能装束を着て小道具をもつ鬼が描かれた絵巻

能「紅葉狩」を絵巻物に仕立てた作品です。「紅葉狩」は、信濃国の戸隠山で美女に化けて酒宴する鬼を平維茂が退治する人気作です。能の絵巻は少なく、「紅葉狩」の絵巻は本書のみですが、絵巻自体は当時の典型的な作りです。本文には役名や節付もあります。よく見ると、維茂と対峙する主役の鬼のみ、能装束らしきものを着て小道具の打杖を持っています。

（川崎）





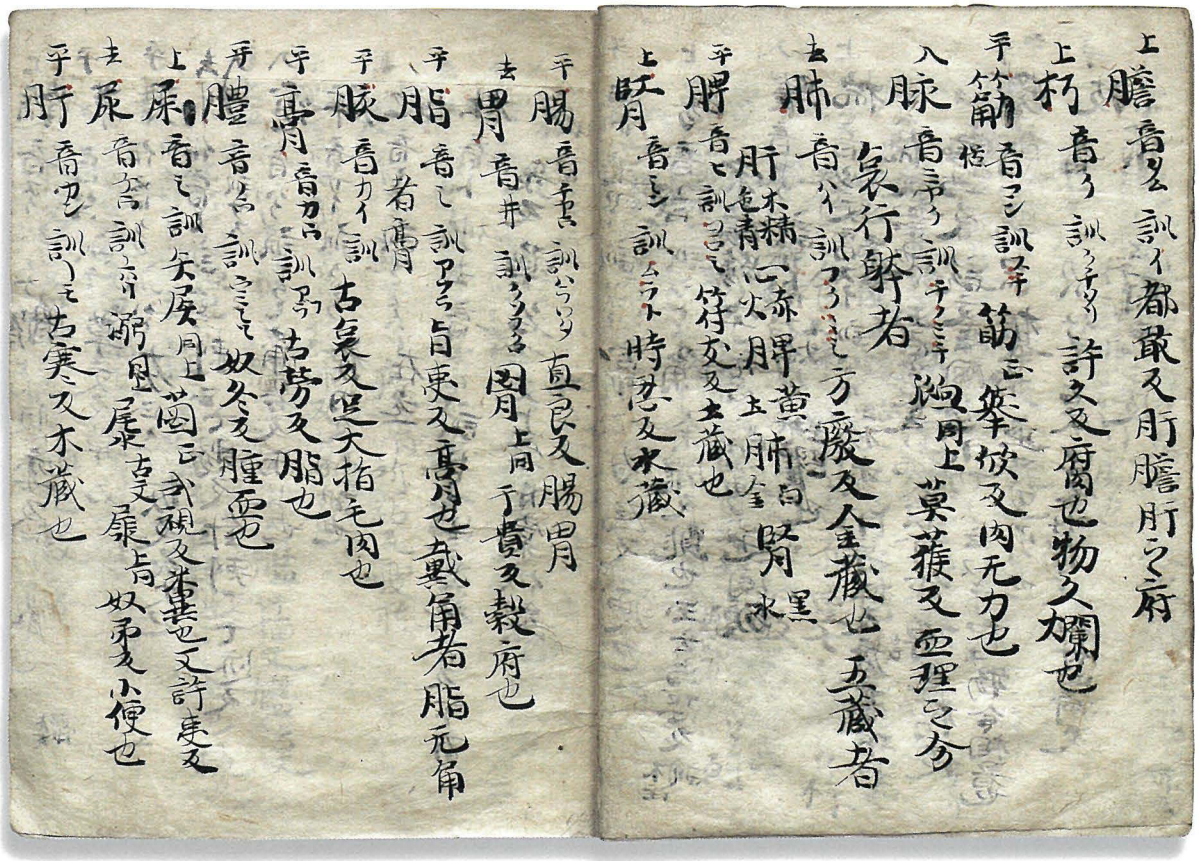
4－5

宋版　一切経音義

与謝野寛が短歌に詠んだ宋版

北宋後期、中国の福州の東禅寺で印刷された六、〇〇〇余帖の一切経のうちの一帖です。京都の三聖寺（廃寺）に輸入された一切経が分散し、和気郡内の神社を経て文庫に入りました。玄応撰の一切経音義は全二五帖（本書は巻第二）で、一切経の難解な漢字・梵字の発音や意味が記されています。文庫を訪ねた与謝野寛は本書に目を留めて、「西の窓藤若葉より風わたり伊部の鉢に竝ぶ宋版」と詠みました。

（川崎）

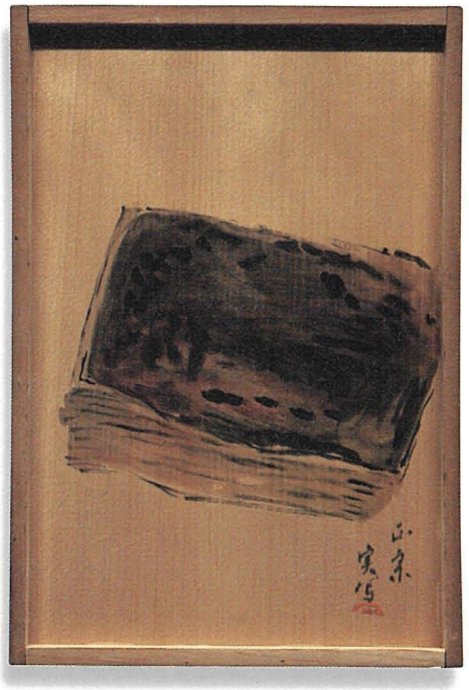


4－6 倶舎論音義

幻の仏書・日本語資料の再発見

倶舎論は小乗の経典で、日本でも法相宗の寺院を中心に熱心に研究されていました。この本はその音義で、難解な熟語や漢字を抽出して、音・訓について解説しています。漢字には和訓が付けられ、和訓にはアクセントや清濁を示す声点が付けられています。昭和初期から注目された貴重な日本語資料ですが、長い間、所在不明とされてきました。

（川崎）



4-7

饅頭屋本節用集

この本は天が我に恵んだ物

出版された最古の節用集（イロハ引き国語辞書）で、饅頭屋と号した奈良の町人学者、林宗二の手になります。珍本なので敦夫は昭和四年（一九二九）に図書寮（現在の宮内庁書陵部）所蔵本を覆製しましたが、その頃、岡山市内の古本屋でもう一本を偶然入手しました。喜びの余り、木箱を作らせ、弟得三郎に書姿を描かせています。後に敦夫は郷土の和学者土肥経平旧蔵書かと推測しています。

（小川）

〈紹介〉国文学研究資料館

National Institute of Japanese Literature

国文学研究資料館（東京都立川市）は、国内各地に所蔵されている日本文学とその関連資料を大規模に集積し、日本文学をはじめとするさまざまな分野の研究者の利用に供するとともにそれらに基づく先進的な共同研究を推進する、日本文学の基盤的な総合研究機関です。集積した約三〇万点（三、二〇〇万コマ）に及ぶ画像デジタルデータは、「国書データベース」【https://kokusho.nijl.ac.jp/】で無料で公開していますので、皆さまも一度アクセスしてみて下さい。

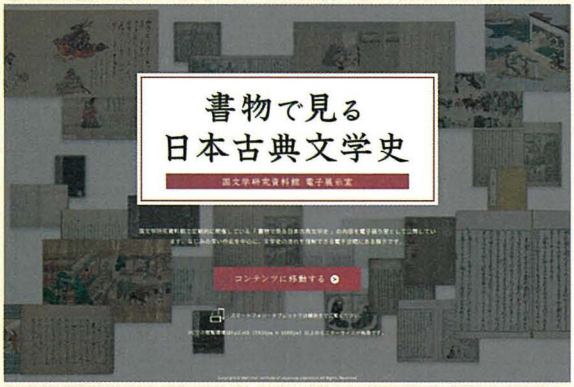
正宗文庫（岡山県備前市）との御縁は二〇〇二年からで、岡山在勤の日本文学研究者の協力のもとに、定期的に文献調査とデジタル撮影を進めています。集積したデータを基盤として、二〇二二年度からは新たに共同研究「正宗文庫の研究」（代表 川崎剛志就実大学教授）を開始しており、正宗文庫の豊かさをメンバー全員で追究しています。

（神作（かんさく））

国書データベース
https://kokusho.nijl.ac.jp/

使い方【PDF】

くずし字を読む
https://www.nijl.ac.jp/koten/kuzushiji/



書物で見る日本古典文学史
https://www.nijl.ac.jp/etenji/bungakushi/

電子展示室「和書のさまざま」
https://www.nijl.ac.jp/etenji/washo/

若冲、色彩の魔術師

フルカラーの時代相の中で、若冲があえて挑んだのがモノクロームの版画「拓版画」です。いわゆる「拓本」と呼ばれている版式で、『乗興舟』や画譜三部作（『玄圃瑤華』『素絢石冊』『賞春芳帖』）が高名です。本作品は拓版画ではありませんが、拓版画を強く意識させる黒を背景として、多色摺りによる鮮やかさが際立った優品です。

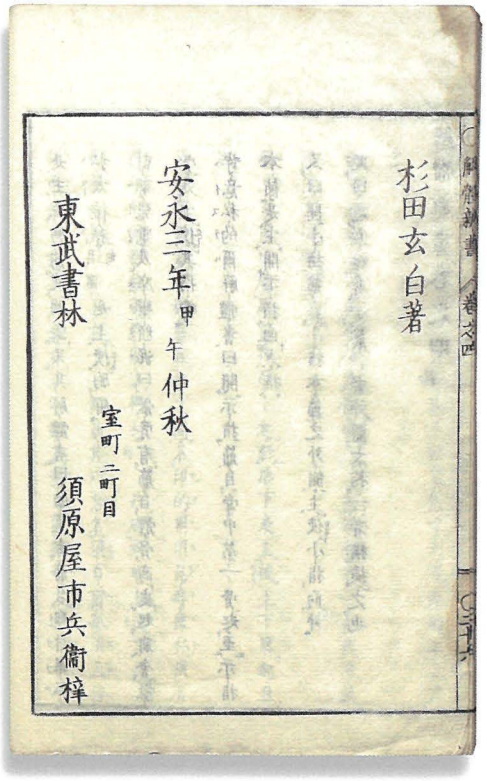
（神作）

5-1

伊藤若冲「花鳥版画」

（椿に白頭図）

也。又或震然揭旗鼓。亦皆不知解體之法徒屬五浪。豈不閔乎。惜哉世雖有豪傑士。汚習惑乎耳目。未能披雲霧而見青天也。故苟非改面目者。則不能入其室也。嗚呼人有能有不能。余之不才。斷斷無它技。唯獨於斯業。專精得以明之。誠無慙乎古之人。而其所權輿。要在改面目也。如與余同志。從事于斯。則庶乎得而至也。雖然余不爛乎文辭。故於斯書。姑達其意而已。讀者如有不解者。追余之生質訪之可也



杉田玄白著

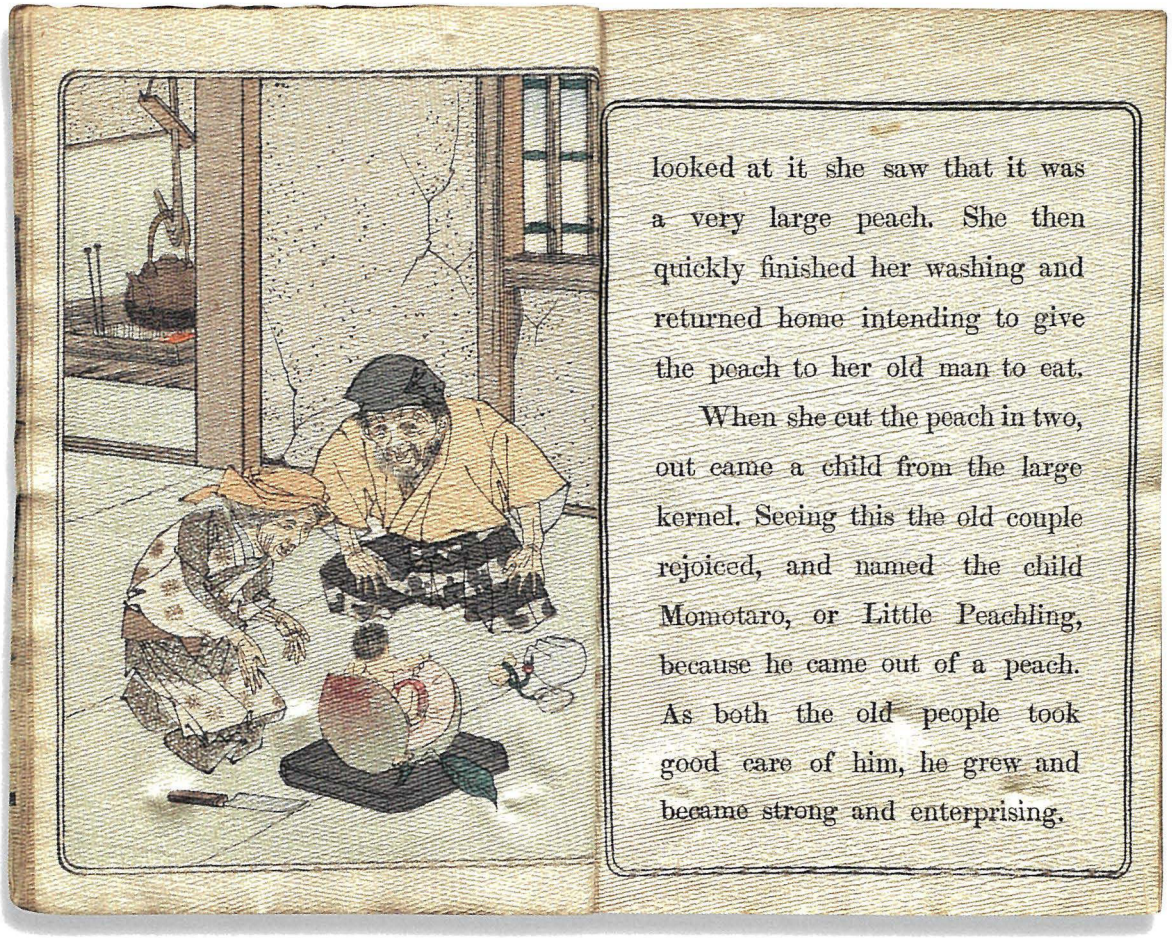
安永三年甲午仲秋

東武書林　室町二町目　須原屋市兵衛梓

5-2 解体新書

医学書の古典、実は漢文で書かれています

『解剖図譜』のオランダ語訳『ターヘル アナトミア』を前野良沢・杉田玄白らが漢文訳した『解体新書』は、安永三年（一七七四）に刊行されました。四巻・解体図一巻の五巻五冊。江戸の須原屋市兵衛版（所付けの異なる二種が知られ、展示本は室町二丁目版）。「神経」「動脈」「軟骨」などの訳語は、本書から生まれました。（神作）



5-3

Momotaro（ちりめん本）

御当地ものの代表格、桃太郎の英訳本

ご存じ『桃太郎』の成立はそんなに古くはなく、現在確認される最も古い文献は江戸中期に刊行された草双紙（赤本）です。御覧の書物は、明治一八年（一八八五）に刊行された英訳本（ダビッド タムソン訳、東京長谷川武二郎刊）。布地に縮緬織りのようなシワが見られることから「ちりめん本」と呼称されています。（神作）

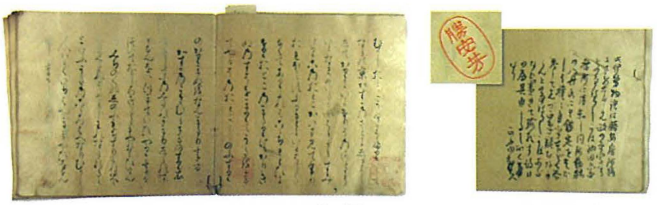
特殊文庫書庫内部

〈紹介〉ノートルダム清心女子大学の正宗敦夫文庫

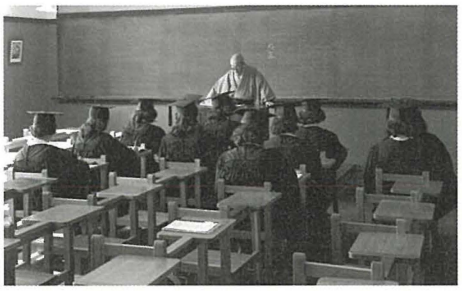
ノートルダム清心女子大学の「特殊文庫」は、昭和二七年(一九五二)四月、国文学科(現日本語日本文学科)創設の際に設置された貴重書庫であり、現在は、約五、〇〇〇冊もの貴重な古典籍が所蔵されています。

特殊文庫には、「黒川文庫」ならびに「正宗敦夫文庫」があります。黒川文庫は、初代学長シスター・メリー・コスカが、「日本人女性に日本文化のすばらしさを認識させるための教育を」との教育理念を持ち、江戸の歌人・国学者の黒川春村(一七九九～一八六六)、養子である黒川真頼(一八二九～一九〇六)、孫の黒川真道(一八六六～一九二五)ら、黒川家蔵書の和歌関係を中心とする約一、〇〇〇点、三、〇〇〇余冊を購入し、設置されました。その際には、国文学科発足当初の教授であった正宗敦夫が、東京神田神保町の一誠堂書店に泊まり込み、黒川家旧蔵本歌書類の散佚を防いだと伝えられています。

「正宗敦夫文庫」は、正宗敦夫の蔵書のうち、講義のために収集した歌書類を中心とした約一〇〇点、四〇〇余冊が、昭和四〇年(一九六



伝池田光政筆『伊勢物語』（勝海舟旧蔵）



学生に指導する正宗敦夫

伝二条為明筆『金葉和歌集』

五）に同大学に移管されたことより設置されました。財団法人「正宗文庫」と区別するために、「正宗敦夫文庫」と名づけられています。本文庫には、『金葉和歌集』に関する一三点もの写本が揃っており、本文庫の資料を欠いては、『金葉和歌集』の学術的な理解は得られないほどの充実度を誇ります。その中でも「伝二条為明筆『金葉和歌集』」は、『新編国歌大観』「新日本古典文学大系」の底本に採用され、拠るべき本文として広く参看されています。このように、正宗敦夫が教育のために収集した古典籍からなる「正宗敦夫文庫」は、その教育の質の高さを窺うのに十分であるばかりか、その学術的価値は計り知れないものがあります。また、古典籍のみではなく、正宗敦夫の同大学における授業「古今集演習」「近世和歌史」の、几帳面に丁寧に記された、緻密な講義ノートも残されており、それは、研究の最前線を学生に伝えようとした、正宗敦夫の教育に対する熱意が一字一字から滲みわたってくる逸品ともいえます。

特殊文庫の目録は昭和五〇年（一九七五）、当時日本語日本文学科の教員であった赤羽淑を中心に編集・刊行されました。この『ノートルダム清心女子大学付属図書館所蔵特殊文庫目録』は全国の図書館や研究者に頒布され、現在も岡山県内外より、多くの研究者が特殊文庫の資料の閲覧に訪れています。本目録は、現在、在学生や学内外の研究者の協力を得ながら、新たに改訂する計画が進んでいるところです。

（ノートルダム清心女子大学　東城敏毅）

就実大学外観

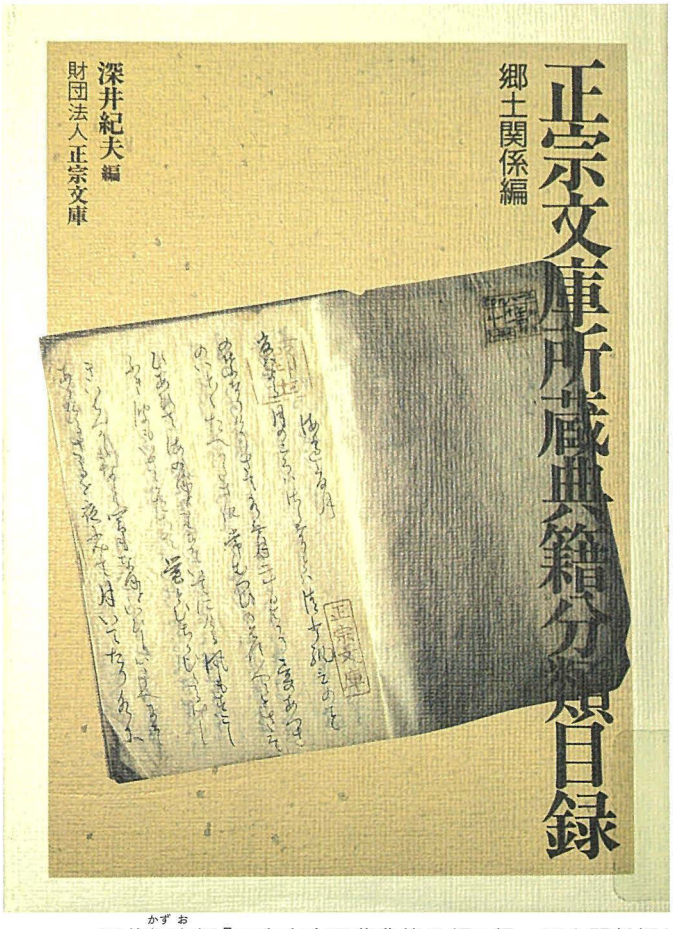
〈紹介〉就実大学 正宗文庫とのご縁

就実大学・就実短期大学の基本理念は「去華就実（かをさりじつにつく）」です。去華就実とは、外面の華美に走ることなく、豊かな人間性を求め、内面の充実に努める心のはたらきを意味します。

正宗文庫と本学とのご縁は、一九九〇年、現理事長の正宗千春氏と就実短期大学部長の故深井紀夫（かずお）氏が文庫の整理・再建に着手されたことに始まります。伝えることは、創ることと同じくらい価値のある行為です。深井紀夫（かずお）編『正宗文庫所蔵典籍分類目録　郷土関係編』（財団法人正宗文庫、一九九五年、本学出版助成）によると、正宗氏は「先生はこの貴重な書籍を後世に伝えるためにもしっかりとした目録を作りたいと言われ、空調設備の無い当文庫で夏は汗まみれになり冬はカイロをしのばせて長年にわたり調査して頂きました」と述べ、深井氏は「炎暑厳寒の中、一冊一冊丁寧に埃を払い、手控えの記録と照合し、書架に並べる作業を、陶芸家としての本務のかたわら終始手伝って下さった正宗千春氏の御協力」に謝意を表しています。国文学研究資料館による調査が始まると、深井氏は「国文学文献資料調査員」を務め、以来、本学の教員も調査に携わってまいりました。

昨年、第二回正宗文庫セミナーが本学で開催されました（第一回はオンライン形式）。このたびも共催者として本展示に参画できたことを、光栄に思っております。去華就実の理念を体現された故深井氏の思いと行いの跡を追い、私どもも「この貴重な書籍を後世に伝える」活動に真摯に取り組んでまいります。（川崎）

第2回正宗文庫セミナー会場風景（川崎剛志（つよし） 講演 2022年9月10日）



深井紀夫（かずお）編『正宗文庫所蔵典籍分類目録　郷土関係編』

岡山県立博物館外観

〈紹介〉岡山県立博物館

かつて、吉備国と呼ばれた岡山県には、北九州・近畿地方とともに早くから文化が華開き、今に至るまで多くの文化財が残されています。岡山県立博物館（岡山県岡山市）は、原始・古代から近世に至るまでの文化遺産を収集保存して、長く後世に伝えるとともに、その代表的なものを展観するための歴史博物館です。県政百年の記念事業として一九七一年に開館しました。

開館から五〇年近くを経過し、建物の老朽化が進んでいたことや、耐震補強の必要があることから、二〇二〇年度から二〇二二年度まで休館し、耐震工事を行うとともに、展示室や収蔵庫といった、文化財の展示・保管施設の改修工事などを行いました。

特に今回の改修により、二階展示室は、黒を基調とした内装に一新しました。また、機密性の高いエアタイトの展示ケースを採用し、展示室内の温湿度の影響を受けにくくするとともに、透明度の高い高透過ガラスにすることで展示品の繊細な模様や質感まで感じていただけるようになりました。

二〇二三年四月に全面再開館した当館では、考古・美術・古文

岡山県立博物館
ホームページ

書・民俗・刀剣・備前焼などの文化財を展示し、岡山県の歴史と文化を紹介する平常展と、テーマ展や特別展を随時開催しています。平常展についても、展示品を適宜入れ替えており、博物館を訪れるたびに楽しんでいただけるよう工夫しています。

また、学校教育との連携にも重点を置いています。館内での学習を行う「館内授業」や、学芸員が学校を訪問して行う「出前授業」、中学生や高校生の希望者を対象として学芸員の仕事などを体験する「職場体験」「ジュニア学芸員講座」を行っています。このほか、休館期間中からは、小学生から高校生を対象に、岡山の歴史や文化財に関する質問について、学芸員がオンラインで回答する企画を夏休み期間に実施しています。

さらには、大学生を対象とした「博物館実習」を実施しているほか、博物館の収蔵資料の整理・研究・展示ならびに社会教育活動の発展や、大学の人材育成を目指して、二〇二〇年一〇月には就実大学人文科学部と連携協定を結び、様々な取り組みを行っています。

展示内容や館内行事についての情報は、博物館のホームページに掲載しているほか、ツイッター、フェイスブックでの発信も行っていますので、ご覧ください。

ぜひ、みなさま、岡山県立博物館へご来館ください。お待ちしております。

（岡山県立博物館　内池（うちいけ）英樹・平田良行）

出品リスト

No.	名称	年代	員数	整理番号
第一部　正宗家の人びと				
1-1	正宗敦夫の編著書	大正〜昭和刊	五点	
1-2	備前国絵図	正徳三年写	一舗	郷土七九二
1-3	灘村及井田、木生之絵図	〔江戸後期〕写	一枚	郷土七三六
1-4	唐樹園蔵書目録	〔江戸後期〕写	一冊	郷土二五〇〇
1-4	書画展観録	文政一二年刊	一冊	郷土八七〇
1-5	朝顔百首狂歌集	文政一三年刊	一冊	郷土八四一
1-6	井田村神社奉納三十六歌仙稿本	〔江戸末期〕写	一帖	郷土一三五七
第二部　敦夫の歌道の師と友人、出版事業				
2-1	井上通泰大人詠草註解	明治三二年	一冊	
2-2	南天荘同志写真帖　第一集	明治四五年刊	一帖	
2-3	万葉集新考原本	大正三〜一四年	三七冊	師友一五四
2-4	金葉和歌集評釈	明治四〇〜四一年	六冊	師友二一三
2-5	池袋大人詠草	明治三五年頃	一冊	師友五五六
2-6	かゝしのや集	明治三六年刊	一冊	郷土三九七
2-7	雑誌『国歌』	明治三九〜四二年刊	三冊	郷土一九七八
2-8	宮内猪之熊集	大正二年刊	一冊	郷土一九七五
2-8	宮内久子書簡	大正二年	一通	
2-8	森鷗外ハガキ（自筆）	大正二年	一通	
2-9	鶏肋	大正四年刊	一冊	郷土一九七六

No.	名称	年代	員数	整理番号
2-10	歌集雑記（仮称）	〔大正〜昭和〕写	一冊	
2-11	『万葉集総索引』関係資料	昭和四年	三点	
第三部　正宗文庫設立と郷土偉人の著作				
3-1	正宗敦夫文庫仮字目録	明治三八年	一冊	
3-2	財団法人正宗文庫設立趣意書	昭和一一年	一冊	
3-2	正宗文庫設立に関する資料	〔昭和初期〕	一式	
3-3	「穂浪だより」「ふぐらにこもりて」原稿（写真）	昭和二四年刊	二冊	
3-4	卜養狂歌集	寛文一〇年写	一軸	郷土一〇七七
3-5	蕃山先生状	天明七年刊	一冊	郷土九八八
3-6	熊澤了介先生事跡考	文化一一年序刊	一冊	郷土一二二
3-7	集義和書	寛文一二年刊	一一冊	郷土一七二二
3-8	源氏外伝	延享元年写	二冊	
3-9	吉備和歌集	元文二年写	二冊	郷土四五八
3-10	吉備和歌集　存巻一〜一〇	〔江戸中期〕写	一冊	郷土五八五
3-11	吉備和歌打聞　存巻一〜四	〔江戸中期〕写	一冊	郷土一二三四
3-12	応兵記	〔江戸中期〕写	二冊	郷土一七一三
3-13	先君子与仲龍書	〔江戸中期〕写	二冊	郷土一七一四
3-14	焚余稿	天明七年刊	一冊	郷土五四
3-15	常山楼集　巻一	〔江戸中期〕写	存七葉	郷土一一

No.	名称	年代	員数	整理番号
3-16	常山紀談	明和九年写	三冊	郷土一三
3-17	常山紀談	明和七・八年跋刊	六冊	郷土一七九三
3-18	文会雑記	〔江戸中期〕写	五冊	郷土九六三
3-19	大丈軒譜	〔江戸前期〕写	一冊	郷土一四三一
3-20	大丈軒集	〔江戸後期〕写	二二冊	郷土一五五一
第四部　善本の宝庫				
4-1	嵯峨本伊勢物語	〔江戸初期〕刊	一冊	四九
4-2	古活字版　源氏物語	〔寛永頃〕刊	一九冊	一五九三a
4-3	こあつもり	〔室町末期〕写	一軸	一〇二一
4-4	もみぢがり	〔江戸前期〕写	一軸	五九
4-5	宋版　一切経音義	北宋・崇寧二年刊	一帖	一八四三
4-6	倶舎論音義	〔鎌倉前期〕写	一帖	
4-7	饅頭屋本節用集	〔室町末期〕刊	一冊	二
〈紹介〉国文学研究資料館				
5-1	伊藤若冲「花鳥版画」（椿に白頭図）	〔江戸中期〕刊	一枚	ユ三―二五二
5-2	解体新書	安永三年刊	五冊	ヤ九―五五五
5-3	Momotaro（ちりめん本）	明治一八年刊	一冊	ム八―三八

主要参考文献一覧

○正宗敦夫編『蕃山全集』（蕃山全集刊行会、一九四〇～四三年。増訂版、名著出版、一九七八年）
○後藤亮『正宗白鳥　文学と生涯』（思潮社、一九六六年）
○正宗敦夫『金葉和歌集講義』（自治日報社、一九六八年）
○浜崎美景『森鷗外周辺』（私家版、一九七六年）
○山縣二雄『図書館をめぐる日本の近世あわせて岡山県図書館の歴史と年表および金光図書館史稿本』（私家版、一九八一年）
○正宗甫一「正宗敦夫伝」（古典研究9、一九八二年三月）
○吉崎志保子『歌人小野節の略伝』（小野暁、一九八六年）
○吉崎志保子『正宗敦夫の世界　階上階下すべて書にして』（私家版、一九八九年）
○深井紀夫編『正宗文庫所蔵典籍分類目録　郷土関係編』（正宗文庫、一九九五年）
○『井上通泰文集』（島津書房、一九九五年）
○赤羽淑『正宗敦夫をめぐる文雅の交流』（近代文学研究叢刊、和泉書院、一九九五年）
○村山鎮雄『画家　正宗得三郎の生涯：史料』（三好企画、一九九六年）
○磯佳和『伝記考証　若き日の正宗白鳥―岡山編』（三弥井書店、一九九八年）
○香内信子『与謝野晶子と周辺の人びと―ジャーナリズムとのかかわりを中心に』（創樹社、一九九八年）
○正宗文庫調査班編「正宗文庫目録（五十音順、典籍編）」（国文学研究資料館『調査研究報告』二九号、二〇〇九年三月）
○西崎亨『倶舎論音義の研究』（思文閣出版、二〇一〇年）
○新美哲彦ほか編『正宗敦夫収集善本叢書』第一期（武蔵野書院、二〇一〇年～一三年）
○吉田竜也『正宗白鳥論』（翰林書房、二〇一八年）
○倉地克直『絵図と徳川社会　岡山藩池田家文書絵図をよむ』（吉川弘文館、二〇一八年）
○熊代正英『寛・晶子の岡山吟行』（岡山文庫、日本文教出版、二〇二一年）
○小川剛生編「覆刻　正宗敦夫「穂浪だより」「ふぐらにこもりて」（金光図書館報『土』掲載）付、索引」（国文学研究資料館『調査研究報告』四三号、二〇二三年三月）

岡山県立博物館
2023年度（令和5年度）テーマ展
正宗敦夫と正宗文庫

主催　岡山県教育委員会、岡山県立博物館
共催　一般財団法人正宗文庫、就実大学人文科学部、
人間文化研究機構　国文学研究資料館
発行日　2023年9月9日
発行　人間文化研究機構　国文学研究資料館
就実大学人文科学部
編集　川崎剛志・小川剛生・神作研一
制作　株式会社中野コロタイプ

©2023 大学共同利用機関法人 人間文化研究機構 国文学研究資料館
本書の全部または一部を無断にて転載・複製することを禁じます。